Fate/chaos chronicle

あんのうん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一つの地、七つの座、七つの器、さあ準備は万事揃った、聖杯戦争を始めよう――

総てが混沌に呑まれしこの戦争、総てが狂い、総てが異常。

器を満たして飲み干すは誰か。

満たせし器の中身は何か。

それは勝者のみが知る。

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの二次創作です。主役陣は変わらず、サーヴァント

が変化します。
主役級に於いては、誰一人として同じサーヴァントは出てきません。多重クロスになるので、ご了承を。
にじファンから移動してきました、彼方は削除済みです。

目次

語部の謳い　1
1、前夜　3
2、前夜―2　14
3、前夜―3　28
4、初日―1　38
5、初日―2　49
6、初日―3　60
7、初日―4　71
8、初日―5　82
9、初日―最終　92
10、初日→二日目―幕間　108
11、二日目―1　118

語部の謳い

極東は冬木の地、聖杯戦争なるものがあった。
救世主の血を受けた杯とされる聖杯。
その聖杯に匹敵せんとするほどの強大な願望器。
それを顕現させるべく行う大掛かりな呪法。
器は一つ、満たす中身は七種。
一つは剣の騎士
一つは弓の騎士
一つは槍の騎士
一つは騎乗兵
一つは魔術師
一つは暗殺者
一つは狂戦士
それら七つのクラスに見合う英雄を召還し、骨肉相食む戦いを繰り広げるは七人の魔術師。

そも、彼方の昔から呪法を使うは魔女か魔術師と相場は決まっている。
さあ、抗え。
死に抗い、生を攫め。
負に抗い、勝を攫め。
理に抗い、万能の願望器を攫め。
奇跡には代償を。
願いには数多の血を。
競え、奪え、殺せ、貶め、騙せ。
これは戦争である。
只独りの勝者だけが栄光を攫む、聖杯戦争である。

1、前夜

そこは暗い室内だった。洋風にまとめられたシックな内装は、誰が見ても一級品である事を否定できないであろう品格を持ち合わせている。それだけであれば只の品のいい部屋だが、一つだけ瑕疵というには目立ちすぎる一点がその部屋の印象をある種真逆に変えていた。鮮やかな発色の赤で描かれた魔方陣、それがこの部屋の空気を別のものへと切り替えている。

それは最も効率が良い形で、そして最も美しい理想的な魔方陣であった。材料は宝石――純度が高く魔力も込められた、一級品礼装レベルの石を熔かして作られた特製の触媒である。手持ちでこれ以上の純度の宝石は、代々受け継ぎその度に魔力を込めてきた特級の紅玉（ルビー）位の物であろう。陣の前に立つ彼女にとって切り札である一枚、最後の最後の奥の手である石以外にはこの家に存在しない。

居間で時間を確認し直す……柱時計は予想通りの時間を刻んでいる。彼女が最も魔力を発揮しやすい時間はまさに今この時だ。

さあ、星辰は整った。

静々と手に抱えるは召喚触媒である。丹念に布に包まれ、呪術結束で括られたその中

身は傍目にはどう見ても単なる鉄の板の様である。錆びた鉄屑で形容してもいいだろう、それがこの現代には有るまじき濃度の神気を宿してさえいなければ。

本来はもっと別の触媒を探しに向かった筈であった、歴代当主が遺物を溜め込んできた保管庫で掘り出してきた物体がこれである。どう見ても只の鉄屑にしか見えない分際でこの噎せ返る程の神秘、時代も何処の物とも判別できない何とも奇妙な鉄の板だが、ただ見ているだけでも当てられて酔いそうな程の神気を感じるその異常性に彼女は目を付けた。布と紐で結わえて放り込んであったような扱いをされていたが、気持ち悪くなる程濃い想念を放出するこの物体に今まで気付かなかったことこそが一番の異常である、という事実に聡明な彼女が気付く事は遅くはなかった。

それこそ、社格を上から数えた方が早い神社の神宝もかくや、と言わんばかりの神気を放つこの物体。鑑定士に鑑定してもらった結果、恐らくは段平や大型両手剣のような巨大な剣の一部の様である、と鑑定されたが結局の所それが本当かどうかはよく判らない。ともすれば神剣か何かの破片だと言うのだろうか、名古屋の熱田神宮などにはどう考えても人には持てない様な巨大な刀が奉納物として神宝の一つに計上されているのは彼女も知ってはいた。結果、確実に解った事といえば布も結わえていた紐も特級の封印呪具だったと言う位だ。ともあれ、そんな曰く付き極まりない鉄板を所定の場所に収めて、準備も整った。

大きく息を吸い込み、吐き出す。

呼気が食道を通り肺に到達、そこに含まれた清浄の概念を取り込む過程を幻視しながら行う。

精神の純化を含めた最も単純な魔術、詠唱も何も必要としないそれは、ある意味でスイッチかもしれない――即ち、人と、人以外のものとの。

『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。』

魔術行使の際に感じる悪寒のような恍惚という極めて矛盾した感触を感じながら、彼女は召喚に必要な最初の一小節を謳い上げる。最初の一小節で、まずは誓言を立てる。自らが寄って立つモノへの誓言。裡から魔力を組み上げ、体内に廻す。それはエンジンにも似ている。ぞくり、と尾?(びてい)を這い出し背筋を泡立たせるその感触は官能の疼きにすら似ているかも知れない。今の彼女は、未分化で方向性の無い無色の可能性を湧出させる一個の力の塊である。

『降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ』

二つ目の小節。これで魔力を注ぐべき道筋を付ける。第一のセフィラーである王冠(ケテル)から、第十のセフィラーたる王国(マルクト)への順路を既定する。それにより指向性を得た魔力が、腕に刻まれた魔術刻印の稼働率を一気に最大まで上げていく。本来人に在らざる異

物である魔術回路の稼動による魔力の循環はギリギリと腕を、身体を痛覚で蝕み、現世を浸食する力と為して行く。其処に、こんこんと泉のように湧き出す魔力の悪寒と恍惚という相反する感覚を重ねた彼女の体もまた、急流に流されるように臨界へと押し流されて行く。

『閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。繰り返す都度に五度。ただ、満たされる刻を破却する』

内圧で今にも破裂しそうなそれを制御下に置く第三の小節。門を閉じられ体内で暴れるように循環するそれは、循環するごとに純度の高いものへと昇華していく。体内を巡る熱と悪寒、それらは魔術師であるならば一度は感じた事があるに違いない魔力純化のプロセス。

己の体内にまるで星雲銀河のように渦を巻くそれを確認して、次の小節へ進む。

『――Ａｎｆａｎｇ（セット）』

あくまで、あくまで表面上は物質界（アッシャー）の上では静けさを保っている、その偽りの静寂で張り詰めた力の風船を破る。そして、彼女の魔術を行使するための最も有り触れた一言。

『――告げる』

まずは一度、自らの言霊がどれほど場に浸透するかの予備動作。発された言葉は消え

る事無く力と化して渦を巻く。それを幻視して、更に次の動作へ。

『――告げる。　汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』

一息に構成を編み上げる。ここからは一刻一寸たりとも無駄に出来ぬ勢いの勝負だ。純化し、濾過された体内で渦を巻いている魔力をそのまま召喚陣へと廻す。程無く、ごう、と渦巻くエーテルの奔流。それは未だ魔道の道半ばにして、既に一線級の魔術師である彼女をして間違いなく会心の手応えを予感させる純度で巻き起こる。だがこれ等は予定通りの事象にしか過ぎない。魔方陣の構成触媒に使用する宝石も吟味し、占星術による自らの魔力補整が最も高まる時間帯も綿密に計算した。一目には謎の鉄板にしか見えない召喚触媒ですら幾つかの候補から、最上級の神秘を持つ触媒を厳選した結果に過ぎない。何時だって重要な物程、隠されて何の変哲も無い物に見えるのだから。

『誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天』

これ以上は無いと言う程に高まる力の中心にいる自分、世界のあらゆる場所、あらゆる部分全てに己が浸透しているような仮初の全能感そのままに彼女は確信する――間違いなく最強のカードを引き当てた、と。そうで無くともここまでのお膳立てをしての召喚、間違いなど起こるはずも無い。彼女はそう確信していた。

エーテル乱流が激しくなるにつれ痛いほどに反応する手の甲に、彼女はちらりと視線を這わせた。そこには何時の間にかまるで刺青のような鮮やかな幾何学的模様が刻まれ、それが発光と明滅を凄まじい速度で繰り返す。

さあ、来れ、と彼女は希求する。力が少しずつ圧縮され形へとなるのを感じる。

『抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！』

その瞬間を見計らって最後の小節を紡ぐ――！

だが。

どんがらがっしゃー

思うとおりのものは現れず、凄まじい音が彼女を現実に引き戻した。

★

聖杯戦争――そう呼ばれる秘儀が存在する。

それは極東日本の某地方都市にだけ存在する秘儀である。元々の聖杯とは基督の血を受けた器とされ、それを所持するものはあらゆる願望を叶えるなどという伝説も存在する一級、いや超特級品の礼装である。嘗て多くの者がそれを捜し求めた。オカルトの実在を信じ、政治にオカルトを密接に絡ませ実際に古代の遺物を集めた、かのアドルフ＝ヒトラーまでもが捜し求めたという説もある。だが此処でいわれる聖杯とは、広義の

意味での聖杯であるという事が注意点であろうか。この広義の意味での聖杯と言うものは、別段杯の形である必要は無い。物質である必要すらないのだ。

究極の願望器――それこそが広義の意味での聖杯と言う物体の定義なのである。そしてこの聖杯戦争とは、極東日本にある冬木の地に聖杯を降ろす巨大な降霊儀式なのである。

用意された器は七つ、器を満たし飲み干す使役者が七人――これのみが聖杯戦争に参加できる。彼ら七人の使役者は、一人一つずつ器の中身を満たす事が前提条件となる。その器を使い、他の六の器と六の使役者を下した者が聖杯の祝福を得る事が出来る。これが聖杯戦争の内容である。七つの器とは七つのクラス――即ち、剣の英霊『セイバー』、槍の英霊『ランサー』、弓の英霊『アーチャー』、騎乗兵の英霊『ライダー』、魔術師の英霊『キャスター』、暗殺者の英霊『アサシン』、狂戦士の英霊『バーサーカー』。

これらの七つの器に適応する、英霊と呼ばれる伝説の持ち手を召喚するのが、参加に於ける最低条件の一つなのである。即ち、召喚が出来ないということは既に参加以前の問題だという事となる。

更に、もう一つ条件がある。それは魔術師である事と言う前提条件だ。魔術師という世人から隠匿された秘奥を知り、今も伝える存在でなければこの儀式は参加不可能であり、それを選別するのが『令呪』なるシステムである。令呪とは聖杯戦争の準備期間内

にその資格を持つものが、儀式場と化した街へ入る事で刻まれる参加証である。それは英霊を従者（サーヴァント）として召喚使役する為の鍵であり、それを以てして、初めて英霊を召喚できるのだ。

彼女は自らの右手の甲に刻まれたそれを見る。微かに発光しているのは発動中と言うことだろうか。自分と何か別の存在に魔術的同調線（ラインイン）を感じるのは確かではある。ならば、自分の召喚は果たして成功していたのだろうか？疑問は彼女の脳内をぐるぐると廻る。

兎にも角にも、そのラインに従い向かうは屋根裏部屋である。何でそんな場所に――と彼女は考えた。前回の戦争に参加した父親の記述では、当たり前のことではあるのだが召喚物は召喚陣の中に現れると言う。歴代の記述を見ても、勿論当たり前のように例外は無いようだ。大体にして、再三言うがその為の召喚陣なのだ。しかし、彼女の召喚の結果は陣内には存在しない。召喚陣とは、召喚主を召喚した者から守ると言う役目と、召喚の補助、そして召喚対象の自由を奪うという三点の為に作成される物であり、その召喚対象が陣の中にいない時点でこの召喚自体が相当のイレギュラーである事は間違いない。元から召喚士（サモナー）志向ではない彼女としても本格的な召喚は初めてなのだが、それくらいはさすがに常識の範疇として理解できる。

そも、彼女――遠坂凛の家は最初期から現在に至るまで、歴代のこの戦争を経験した

エキスパートである。いや、当事者であると言い換えたほうが良い。既にこの戦争も五回目だが、その五回の中にこのような召喚事故とも言うべき事例は存在しない、という事は相当の椿事であることは間違いないだろう。凛より遥かに劣る最低限度の魔術師ですら大した難度でもない前提条件さえクリアすれば召喚を可能とするこのシステムで、幾ら失敗したとて儀式の根本を間違えるなどと言う半人前以下の事をしない限りは召喚は可能なのだ。事実、召喚自体の成功の証として何者かとのラインの形成を感じ取っているのだから、手酷いミスは犯していない。凛はそう結論付けた。巷ではこじつけたとも言うかもしれないが。

　五度の戦争というこの言葉には二つの意味がある。一つは、5回と言う長きに渡り繰り返された闘争と言う意であり、もう一つは5回もやらざるを得ないと言う事から鑑みる事の出来る事実だ。既に五回、年月にして優に百年以上は続いているこの戦争だが、問題は五回も繰り返さざるを得なかった現状である。一度勝者が出てしまえば終わる戦いを過去四回、その意味は戦争ではどうやら勝者が存在しないというどうにもならない現実だけがのし掛かるであろう。少なくとも前回にしろその前にしろ、遠坂家が勝者になったと言う事は無いようだ。あれば、父親はここにいるであろうし、あの日凛を置いていって以来姿を見せないなどと言うことも無い筈なのだから。孤独には馴れた。そして、孤独が自らと同化する頃には凛の人格は完全無比に出来上がっており、ある意

味で魔術師として純粋な個が出来上がっていたのだ。

「一体、なんなのかしら……」

居間を通り抜ける時、何とも無しに儀式の開始時間の確認にも使った柱時計に眼をやった。時計を何とも無しに眼に入れた瞬間、何かの記憶が頭を掠めた気がして凛は立ち止まる。時計に関する記憶……と、彼女は頭を捻る。確かに年代物ではあるが、そう思い入れがあるというわけでも——。

「ん……？」

唐突に脳裏を掠める記憶に眉を顰める。そういえば、今日は大切極まりない召喚の儀だ。時間に遅れては先祖代々に立つ瀬も無い、とナニカしたような——。

其処まで考えてからはたと気付く。まさか、と他の時計を確認し、そして……理解した。

「時間……間違えた—!!」

その作り物めいた端正な顔に似合わない表情——逆に言えば年頃の少女にあるべき表情で思わず頭を抱える。そうだった、儀式の時間に遅れるなど、と家の時計の針を悉く一時間早めていたのだった。決定的なところで己自身の行動に足を掬われやすい、と遠坂歴代に申し送りされていた秘奥事項。それに対する警戒手段に更に足を掬われるとは、笑い話にもならなさすぎて逆に笑えてくる。

「うーわー……」

事実を目の当たりにし、足取りも重く屋根裏部屋へ向かう。彼女の家系に遺伝レベルで刻まれているであろう特殊スキル『うっかり』がこんなところにまで発動していたのだった。

「どうしてこういうときに限って……」

悔恨の念を只管呪詛の如く呟きながら、頭痛がするかのように頭を抱える彼女が階段を上がって行く。直に辿りつく屋根裏部屋。その扉に手を掛けて――集中する。この先に何がいるのかは判らないのだ。油断すれば、一息で命を狩られる可能性だってあるのだから。警戒を最大限まで上げながら、ノブを捻っていく。ゆっくりと開いていく扉、そしてそこには。

「え、何これ？」

天井には大穴が開いている、まるで何かが落下してきたかのようだ。あの音はこの所為か、と半ばどうでも良いことを考える。

そして室内。落下の衝撃なのだろうか、唯でさえ様々な物品で埋もれた部屋が滅茶苦茶になっている。

そして、その凄まじいまでに荒れた物品の中心に男が埋まっていた。

2、前夜―2

其処は、彼女が知る天井裏の物置ではなかった。屋根には月が見える程の穴が空き、天頂から月光が差し込む部屋は常に暗いはずの部屋を薄明るく照らしていた。更に年月による埃が衝撃により立ち昇り、なんとも言いようのない天然の迷彩効果が発生している。埃と月光の中、ぼんやりと見える人影は体格からして確実に男であると凛は即座に見て取った。大凡の彼我の距離を測定し、即座に魔術を練り上げる。一足で詰められる距離ではないが、油断はできない。先ず以って、一人暮らしの年頃の少女の家に突如現れた見知らぬ男である、警戒するのが一般的にも当たり前の行動であろう。それが己で招き入れたかもしれぬものであっても例外ではない。但し、一般的な年頃の少女は魔術を練り上げなどしないし、ましてや一撃で相手を葬る算段を組み立てる事も無いだろうが。

穴から射し込む光と埃による光の反射は、瓦礫や雑多なガラクタとそこに埋まる男をある種の宗教的絵画の様に見せていた。時が違えば、場所が違えば、凛もそれを破滅の美と称する余裕も有っただろう。簡単に言えば、代々の遠坂の屋敷の屋根に穴が開いておらず、序でに一世一代の儀式が滞り無く行われた場合の話であればと言いかえてもい

いだろう。だからと言って、普段以上に無駄に強力な呪(ガンド)いを無意識に練り上げているのはそんな取るに足らない下らない事が原因では無い。ないったら、ないのだ。

ともあれ、未だ埋まったままの男を凛は油断無く観察する。最も目に付くのは――大きな、大きな体躯だ。今でこそガラクタに埋まった状態だが、立てば１９０ｃｍはあるだろう。黒いマントの下に隠れてはいるが、そこから一部覗く筋肉の隆起は、そのうねりと内包する密度だけで嫌と言うほどの存在感を発揮している。正しく歴戦の勇士と言う言葉を体現している、と断言出来てしまう程に言葉以上に雄弁な説得力があったのだ。大蛇のような太い首に、荒野の様な広い肩幅は戦士と言う存在の有るべき姿の結晶を此処に体現している。

だが、何故だろうか。力強いという印象と同時に、朽ち果てたイメージも重なって見える気がしてならない。遠目には豪壮な軍艦だが近場でよく見れば、座礁して長い年月が経過し、竜骨も痛み切っている――そんな致命的な深さにダメージが蓄積され、疲労困憊の様にも見える。

「……！」

半歩、それが凛が部屋へと踏み込んだ歩数である。ざわりと風が蠢いたと感じた瞬間、気付いた時には既に首元に短剣が当てられていた。タイミングを計り、行使の瞬間を今かと待ち続けていた魔術を嘲笑うかのような速度。詠唱の簡略さと、内に含む威力

の大きさには一家言持っていると密かに自負していた彼女の自信を、僅かにでも揺るがすには充分な『挨拶』だったと言える。何しろ相手が本気なら、とっくの昔に首は身体と永久に離別していたのだ。これが挨拶と言わず、何なのだろうか。魔術を行使しようとする彼女の速度を超えた、発声も行使する意思の速度をすらも超えた一撃――つまりはそれだけの多様な解釈と意味を含んだ貴重な学習機会だったと言えようか。その事実を確りと胸中に抱き、首元に刃を置かれていようとそれでも彼女は慌てない。まだ鬼札（ジョーカー）は此方に有る、言い換えれば最終手段がまだ残っているのだ。最もこの時点、未だ準備期間とも言える現在で使う事になりそうだとは思っていなかった事、それ以前に相手の底すら判らぬ現状で切るには余りにも下策に過ぎる事。それらを重々理解しているが故に、切る事が出来ない。

もし、埋れている男が紅い外套を纏った男であれば。

もし、埋れている男が捻じれた性格の皮肉屋であれば。

もし、埋れている男が彼女を貶しつつも何処かで彼女を尊重するような言動を取る存在であれば。

彼女も何か己でも判らぬ安心感を得て、鬼札（それ）を感情に任せて切っていたかもしれない。だが、所詮は仮定の話である。少なくとも背後に幽鬼の様に佇み、短刀を突き付ける男に対してあからさまな愚策を行う気になどは断じてならない。

この状況は、かなり凛にとって予定外且つ問題外だった。向こうから距離を詰めてきた分、曖昧だったラインははっきりと己とこの男の存在に同期しているのを嫌でも確認出来た。予定外なのは儀式の一部失敗から今に至るまで、問題外もまた然りである。魔法円内に召喚されていればさっさと契約を終えていたであろうし、こんな初期段階で命を天秤に掛ける事も無かっただろう。これから行う事が最終的には殺し合いだとは言え、参加表明するためだけに死んでいては本末転倒甚だしい。

「く……は……っ?!」

せめて背後の男の表情を見て取るだけでも、何しないよりはマシか。刹那の思考が脳内を過ぎり、ちらり、と目を向けただけの筈だった。吹き抜ける凶風の如き殺気に当てられた凛の口から圧し殺した吐息が押し出される。瞳孔が拡いた殺意に満ち満ちた左眼に、隻眼であろうか開かない右眼。あ、私いま死んだ――胸中に浮いたのはこの一言のみ。その事実が、凛にとっての真実を最も正確に表していたのに違いない。そうして見ると、漏れでる声を最小限に抑え得たのは彼女ならではの功績と言える。即ち魔術師としての基礎項目であり最重要でもある、自己の精神制御という所業を相当の次元で修めているという事に他ならない。並みの魔術師ならば、発狂乃至(ないし)は恐慌に陥りかねない。

しかし、幾ら何でも初対面の人間に対する態度ではないし、凡そ英霊と呼ばれる英雄

が取る所業では無いだろう。聖杯からある程度の知識は鋳型式で魂に刷り込まれる仕様になっている以上、状況に混乱した結果とも考えられない。其処まで考えて、ふと脳裏に過ぎった最悪の結論に凛は内心青くなった。まさか自分こそ引いてはいけない物を引き当ててしまったのか。思考すら捨てて闘争本能にのみ特化した考えられる限り最も手の施しようの無い最悪のクラス、狂戦士を。

「此処は何処だ、奴は――何処に行った」

王者の纏う威風の様に殺気を纏う男の第一声は、差し詰め一言一言が致死の呪いに匹敵しそうな怨嗟の塊だった。膨れ上がり過ぎて飽和しているかの様な殺意の前に辛うじて意識できたのは、彼女に向けて放たれたものでは無いからだろうか。短刀を突きつけられているのは凛であるが、その殺気は全く別のモノへ向けられているのが分かる。凛に向かって叩きつけられているのは、其処から漏れ出たほんの余剰に過ぎないのだろう。だからこそ声を出す事も出来たのだ、辛うじてだが。

「――貴方が、探している相手が誰だかは知らない。でも此処が何処かならば、答えられるわ」

「……」

辛うじて搾り出した凛の声に対する返答は無言。だが、凛は交渉の余地を感じ取った。まず先程考えた可能性の内、相手が狂戦士である可能性を即座に排除。狂戦士は他

の全てを犠牲にして殴り合いにのみ特化したクラスと聞く。知能も己の求むるものも、何もかもを絞り尽くして唯殲滅の為にのみ存在する。つまり狂戦士は言葉を発する知力など残っていないのだ。万に一つ何らかの要因で言葉を発するとしても、意思の疎通など不可能と聞く。曲がりなりにも会話が成立しているであろ今を見るにつけ、確実にそれだけはなさそうである。そして背後からは、何かを探る空気が感じられる。であるのならば、適切な会話を選択し条件を提示できれば鬼札を切らずに穏便に済ませる事も可能となる。そう、令呪と言う鬼札を。

「取りあえず、敵意が無いのはわかってもらえる？判ってもらえたのならば、この物騒なものを下げてくれると助かるのだけど」

凛の言葉に、首筋に迫るプレッシャーが消える。まずは一手成功、と凛は胸を撫で下ろす。今の凛の脳内は宛ら詰将棋の気分である。将棋と違うのは、王手が掛かった瞬間に獲られるのは王将駒ではなく命であると言う部分か。理性的とは言いがたいが、話が通じないわけでは無いらしい。

「此処は冬木市、聖杯戦争の地――貴方は此処でサーヴァントとして召喚されたの」

「……召喚、だと」

「ええ、そうよ。だから私は貴方に問うわ――汝、我に召喚されし者也哉？」

刹那の無言の後、返ってきた反応。その声からは先程の殺意は薄れ、変わりに困惑が

その場を占め始めている。其処に、敢えて彼女は男の眼を見て問う。若干薄らいだとは言え、未だ人間とは思えぬ程の眼光を宿すその眼を凝視するのは正直生きた心地はしなかった。だが、本人への確認は儀式的な意味でも行わねばならない最低限の所作である。明らかに格上の霊格を、聖杯からの補助があるとは言え使役するのは本来無理な話である。それを可能とする為の方法が、面倒だが穏便な方法と簡単だが不穏当な方法の二種類が存在する。凛としてはなるべくであれば穏便に事を進めたい。不穏当な方法は確実ではあるが、令呪と言う貴重且つ最重要なリソースを消費してしまう。穏便な方法ならば場合によって根気も必要になるが、令呪を消費せずに済む。やる事と言えば単に互いの同意の元に対等な契約を結ぶ、と言うだけの話ではあるが……実際に行うにはかなり難しい。

　兎に角、間違いなく目の前の男とのラインは繋がっている。その点から見ても、男は凛の喚び出したサーヴァントであろう事は間違いは無い。ならば、後はそれこそ己の才覚次第では無いか。遠坂凛と言う少女が、一個の魔術師として英霊と言う規格外の存在の力を差配し振るうに値する存在であると認めさせるのだ。遠坂凛は、どうして聖杯戦争に参加したのか？始まりの三家の意地か、それとも父の遺志を継ぐ為か？それもある、だがそれだけでは弱い。

「聖杯戦争……七つの器……？この知識は、何だ」

凛の緊張とは裏腹に、男は眼を瞠りながら何かを呟いている。断片的に漏れる単語からして、漸く聖杯からの情報補助が機能し始めた様だ。長かったが、どうにか話が進みそうだ。まあ……最悪徹夜程度で済むだろう。明日は平日だが、どうせ学校など休む気でいたのだし。

「あー、お嬢さんー。相方は話上手じゃないので、ここはオレが話を進めよーじゃないかー」

凛のそんな思考を薄紙の如く破き去り、突如この場に相応しいとは言い切れない軽い声が響いた。幼い少年の様な、跳ねる様な脈動感に溢れる声だ。平素であれば好ましげに聞こえるとは思うが、今は平素には程遠い状況である。端的に言えば、怪しい事この上ない。声はすれども姿が見えぬ事も不信感に拍車を掛けている。不信げな目になる凛と、心なしかうんざりした様な空気を出す男、そんな空気を物ともせず、男が腰から下げていた鞄から光球が飛び出して軽やかに彼女の目の前に静止する。

「えー、私は彼のぷろでゅーさーというかなんというか」

「え、何、もしかして……妖精（フェアリー）？」

光の球から、少年のような声が聞こえる。その光に目が馴れた凛は、軽く驚愕の声を上げた。その光は羽根の生えた小さな少年の姿をしていたのである。妖精（フェアリー）、妖精種と言う進化の分岐した別系統の知的存在である。その性は悪戯を好み、時に人に幸運を、大

抵は多大な迷惑を振りまく存在である。その機動力やそれなりの高度な知能から嘗ては使い魔にしようと魔術師が悪戦苦闘をしたようだが、逆に魅入られて操られたり等と碌な結果に終わらない事が多かった為に、現在では魔術師にとっては大して価値の無い存在である。野生の妖精はこれ全身トラブルの塊である為、近寄らぬに越した事は無い。今は無き凛の父、時臣からもそう教わったことがある。

「おー。やっぱり見えるんだねー。見た目より純粋なのかなぁ?ま、いいや。とにかく、アンタに俺たちが召喚されたのは多分間違いないみたい。んでオレ、パック。見た目のまんまの妖精(シルフ)さ、よろしくー。あっちが――ぎゃっ」

そう言いながら黒い男を指した瞬間、男の手に攫われるように妖精――パックが握り潰される。後には泡を吹いて痙攣する妖精が一人。死して屍拾う者無し、そんなフレーズが凛の脳裏に湧き上がった。ともあれ、先程の狼狽と緊張感がが嘘のように台無しになった事だけは確かだろう。

「あ、いてて……もう、乱暴なんだからなあっ!ええと、こいつは黒い剣士って言ったほうが通りが良いのかな?わかんないけど、ガッツっていうんだ」

おっかなそうだけど意外とそうでもないから、そんなに怖がらなくても大丈夫だぜ。オレはよく掴まれたり叩かれたり、放り投げられたり……あれ、何だか涙が――などと、相変わらず軽い口調でパックはそう言う。所謂デコボココンビなのか、とすんなり腑に

落ちた凛を誰が責めようか。妖精は妖精でも、シルフと言うからには単なるフェアリーでは無いだろう。風でも司るのかも知れない、寡聞にして聞いた事は無いが。
「てかさ、ガッツもなんか喋れよー」
「お前に任せた」
　左眼を半眼にし、視線を茫洋と漂わせながら明らかに面倒臭いという空気を隠そうともしない黒い男、ガッツの態度に凛の米神に青筋が出そうになるが自制する。何時の間にかその辺の瓦礫に座り込んだ挙句、寄り掛かって早くも寝ようとしている始末である。本当に戦士と形容して良いのか判らなくなる無防備さだ。その時点で、既にガッツから話を聞く事を凛は諦める。幸い、パックという別口の情報源がいるお陰で話が早く進みそうなのだ。ここでわざわざ、会話の気が無い相手に強要して状況を拗らせるのは得策ではあるまい。ただ、ここで一つ問題が生じた、それもかなり重要な。
「ええと、パック？申し訳ないのだけど、私、貴方達を知らないのよ。貴方達の原典を、教えてくれるかしら」
　問題とは、英霊として召喚されたであろう彼らについて――凛は何も判らないと言う点に尽きる。彼女とて、有名どころの英雄譚や神話は一通り知っていると言う自負があるが、妖精を連れた隻眼の剣士など聞いたことも無い。その点から鑑みた結果、彼らの英霊としての知名度が低い、と現状そう判断せざるを得ない。

例えば、かの有名なアーサー王ことアルトリウス＝ペンドラゴン公は誰もが知る英雄だが、無名に近いどこかの少数部族に伝わる英雄もまた等しく同じ英雄なのだ。要は、少なくとも英霊と言う座に魂が列聖されている以上、それらは等しく英霊というカテゴリに存在するものなのである。その知名度が低いという事は、それぞれにメリットとデメリットの双方を生じさせる。デメリットとは知名度という信仰を持てば持つほどに、幻想が募れば募るほどに、彼らはそれを糧として現世に強力な影響を与える事が出来る。例え元々の素の状態がどうあれ、人々の幻想に引き摺られる形で存在が固定化されていくのだ。つまりは知名度が低い英霊は、相対的に現世に対する影響が小さい。転じて、影響力の高い英霊に比べて弱体化せざるを得ないという事実を指す。

逆にメリットとしては、対する相手にとって全ての情報が伏せ札になる言う事に繋がる。なまじ知名度が高い英霊は放つ攻撃から嗜好を含め、相手にとって伏せる手札が少ない事に繋がる。強力であることの代わりに、正体を見破ってしまえば手の内をある程度知れてしまう事に繋がる訳である。更には英霊となった存在は、大概の場合肉体の死が英霊になる　直接的要因になる。それは、英霊になって尚も解脱出来ぬ因果となって引き摺られる事も多々ある。飛び道具で死んだものは飛び道具に対し、因果のレベルで弱体化してしまうのが常なのだ。だが知名度の低い英霊であれば、巷で調べる事の出来る情報が少ない。それは力の弱さを補って余りある情報戦略レベルでの優位性を保つ

事に繋がるのだ。何しろ万が一彼らを示す真の名である真名を知られても、負うリスクは無いとは言えないが有名どころと比べて圧倒的に少ない。それらを踏まえた上の彼女はマスターとして彼らの戦力を把握する為にも重要な質問だったが。

「俺たちの原典ってなんだろ？」

「さあな。いきなり頭の中にぶち込まれた情報だと、存在しないそうだが」

いきなり頭の中にぶち込まれた情報とは、要は聖杯の補助機能が漸く働き出した証左だろう。英霊は皆、召喚され偽りの肉体を得た際に戦争に必要である基礎的な知識を自動的に上書きされるシステムになっている。だが、そんなことは今はどうでも良かった。何しろ、途轍も無く聞き捨てならぬ言葉を聞いたのだ。凛は彼女にしては信じられぬ程、恐る恐る口を開く。

「存在しないって……散逸して消えた原典の英霊って事、かしら？」

正直そんなことは無いと思いつつも尋ねるしか無いが、真逆散逸するほどに過去の英霊とでも言うのだろうか。現存する最古の図書館といわれるアレキサンドリアの大図書館は、過去の侵攻や事故などで文献が散逸している。其処から鑑みるに、戦乱に消えていった散逸した伝説が無いとは言えない。であるならば、かなりの儲け物だとも言える。

神代の英雄であれば例え知名度が低い存在であっても英霊である以上、積み重ねた年

月による神秘だけでも相当の潜在能力を持つ。確かにあの触媒の鉄板から感じた神秘を宿しながらも、情報としては皆無であるならば手札は全てが伏せ札。相手のカードの切り方次第では、圧倒的に翻弄することも不可能では無い。何しろ、敵はこちらの手札の枚数すら見えない無明の闇にいるのだから。だが、その予想には致命的な矛盾を孕んでいる。凛の否定的思考も其処に起因している。何故ならば、ガッツはどう見ても中世期の格好をしている。つまりは、確実に神代の英雄では無いだろう。

「……こいつもこの頭にぶち込まれた知識って奴だ、意味が判らんが――」

苦々しい顔をしながらガッツが言葉を切る。その表情に宿るのは何の感情か。静寂が満ちる中、ガッツは現実を見据えたかの様に口を開いた。

「――よくわからんが、ここの世界のモンじゃないらしいぜ。俺たちは」

「え?」

何を言ったのかしら、今クソたわけた事を耳にしたのだけど。凛は我が耳を盛大に疑った。耳掃除は欠かさなかった筈であるが、酷い幻聴だ。その内容に笑うしか無い程の。

「何を恍けた顔をしてやがるんだ?」

何といったものかと言わんばかりに、表情を歪ませるガッツ。聖杯の知識は、あくまで知識でしかない。その知識に基づく情報は、彼自身としてもよく意味が判っていない

のかもしれない。そんな混迷の場に、手榴弾をダース単位で放り込む妖精がいた。言わずと知れた、パックである。

「んー。簡単に言うと、なんか別の世界から俺たち紛れ込んじゃったみたいだよ？」

「別、世界って……えええええええ?!」

パックのあっけらかんとした答えに、彼女は今度こそ己を律する事が出来なかった。

3、前夜―3

「世界を移動って……まるで第二魔法そのものじゃない」
「良く分からんが、なんだそりゃ」
凛の呆然とした呟きに、まるで興味などない有様で疑問を返すガッツ。まだ救いがあるのは、曲がりなりにも興味など無い為りにだが話を続けようとしている辺りか。あくまで曲がりなりにも、という最低ラインなのは如何ともし難い部分だが。確かに魔術士ではない人間には、自分の驚愕は何とも理解が及ばないモノであるだろうとは理解している。してはいるが、ガッツの姿を見る限り、単に只管興味が一片たりとも存在しないだけだというのは解りきった結論でもあった。さりとて、そう納得してしまうのは、凛としても魔術師としても何か負けたような気がする。これも一つの矜持、負けられない戦いがそこにある。
「――世界を渡るっていうのは、魔法の域なの。重要なのは、魔術じゃなくて魔法。人が未だ到達できぬ、五つの極致の一つね」
「そいつはまた随分と大層な話だな」
全く関心が無さそうな素振りでガッツは呟いた。事実何一つ関心が無いのだろう。

己の職分に関わる内容以外は興味を示さず、只結果の理解だけで留める。盲目の猪のような猪突猛進のような無鉄砲さ、先を敢えて見ない徹底した現実主義と言い換えても良いのだろうか。そんな印象を凛は感じ取った。遥か彼方の目的の為に目先しか見ないと言う、どこか何かを掛け違えたようなチグハグさも感じ取れた気がした。そんな役体も無い思考を軽く頭を振って追い出す。

「そう大した話じゃないわ。たった百余年程度、追い求めてきた程度の話だから」

「……夢、か」

「改めて口にしようとすれば形容し難いけれどね。妄念と言っても良いかもしれないし」

「その割には、囚われてるって訳でもなさそうだな」

「そうかしら？　……そうだとすれば、結局夢ってことかもしれないわね」

　微かに何かの感情が含まれたガッツの声を感じ取り、そこで凛は強引に話を打ち切った。実際の所、第二魔法の成功例などという生きた標本に対する興味は尽きせど湧き上がる。凛自身、彼女の家の来歴である大師父の為した秘蹟を曲がりなりにも成し遂げた存在を、そのままになど出来ない。だが、今はそれを検証する時間も無いのは事実。どんなものにも何だって、優先順位があるのだ。今は聖杯戦争に絞るべきであろう。第二魔法についての情報は魅力的な内容だが、実際他の事を考えながら勝利出来る程簡単

な闘争では無い。戦争と言う形容は伊達では無いのだ。

何にせよ、異界の英雄と言うことであれば情報に対するアドバンテージは相当のものだろう。それだけでも相当の優位だ。それに、これ以上は互いに踏み入ってはいけない領域に話が差し掛かろうとしていた。凛はガッツに己と似た物を感じ取った事もある。そうであれば、彼が召喚された理由も何となく判る。召喚対象と召喚主、それぞれに似た存在が選ばれると言うのも常識でもある。運命（フェイト）により引かれ合うのだ、両者は。運命論者ではない凛は、そんな戯言など全く信じてはいないが。

「それで、貴方達は私に召喚されたサーヴァントでいいのね」

大した時間が経った訳ではないが、密度が些か濃過ぎる空間だった。単なる確認を取るだけで、少なくとも一度は死に掛けた。凛の言葉に頷くパックを見ても、未だ人心地が付かない。ガッツに至っては、既に話を聞いているかどうかすら解らない。気付けばまた壁に寄り掛かり、マントに包まって寝始めようとしているのを見る限り、聞いているとは思わない方が良いだろう。最初に感じた殺気が何処かに行ったのか。凛は少し遠い目をして、少しして現実に帰還した。

「……で、クラスは？　黒い剣士なんて言うからには、勿論セイバーなのよね？」

「んー？　実際その辺どうなんよ、ガッツー」

「……ああ、それらしいな」

左眼をどうでも良さげに半眼にして、ガッツは面倒臭げに同意した。態度は兎も角、クラスは予定していた通りにセイバーだったらしい。珍事続きの召喚だったが、最低限の目標だけは達したようだ。そこは素直に安堵する部分だろう。さて、ここで浮上した問題が一つ。黒い剣士などと言う名前を持つ割に、剣の類を持っていないように見受けられる事だ。真逆、先程の首元に突きつけた短刀がそれなどとは言わないだろう。シルエットが基本的にマントに隠れているため良く解らないが、少なくとも腰に佩いているようにも見えない。

「それに、いい加減にまともに立ち上がったらどうかしら」

「ああ、俺もそう思っていた処だ」

背面を取られたりと、碌に立ち姿を見ていない凛の皮肉混じりの言い掛かりである。それを理解しているのか、ガッツの返答には微かに笑いの響きが混じっていた。ガチャリと金属の擦れ合う重々しい独特の響きと共に、ゆっくりと立ち上がるガッツ。その立ち上がった姿に改めて凛は圧倒された。

大きい――第一印象を一言で言えばそれに尽きる。目の前に聳え立つ壁の様な重厚感のある身長は、目算で１９０以上はあろうか。その長身に見合う広い肩幅は、そこに立つだけで威圧を無秩序に撒き散らしている。人混みにあってもその姿を見失う事はないだろう。何しろ、一般的な人間とは根本から何かが違いすぎる。人混みに混ざっ

てみれば、恐らくガッツを中心にした半径数メートルに人間の姿が消える。
　立ち上がった事でちらほらと見える様になったその体躯は、マントの上からも感じ取れた以上に鍛え上げられているのがわかった。その肉体の密度は、元々ガッツが持つ威圧を更に増幅している。左眼のみの隻眼は炯炯と光り、何者でも屈し得ない鋼以上の硬い意思の強さを示している。そこで何か、違和感を感じた。何というか、重心が何処か奇妙である。凛は其れなりに本格的に中国武術を納めている。中国武術に限らず、東洋系の武術は重心移動こそが基本にして真髄。余りにおかしな重心は、服の上からでも把握出来る。左に若干だけど傾いている――そして腕に眼をやって気付く。
「貴方……それもしかして、義手なの？」
　ガッツの左腕は肘下から全てが無骨な鉄で覆われていた。いや、その鉄自体が彼の左腕であったと言っても過言ではない。肘下から全てが義手の剣士など、前代未聞だろう。そんな実質上片腕で剣を操る事が可能なのだろうか。更に異様なのは、その左手からあの召喚触媒の鉄板と同様の神秘を感じる事だろう。
「……ああ、ちょいと喰われてな」
「え、それって大丈夫なの？」
「剣を振る程度なら大した問題は無い。コイツはコイツで、意外と重宝してる」
　幾ら最強のクラスと名高いセイバーとは言え、隻眼は兎も角隻腕は戦士としては致

命傷であろう。彼女の漠然とした問いかけに、ガッツは軽く笑って答える。はて、義手を重宝するとはどういうことだろうか、と凛は刹那考える。確かにあれだけの重量の鉄塊であるならば、殴るなり何らかの方法はあるのだろうと察する。大体にして相手は聖杯の選んだ歴戦の英雄である、闘争の素人の拙い戦力分析では測れない何かがあるのだろう。

「それで、貴方セイバー……剣の英霊なのよね？　剣はどこにあるの？」

当たり前と言えば当たり前な凛の言葉に、ガッツは何とも言えぬ珍妙な顔をした。まるで気付いていないのかと言わんばかりの表情でもある。隣のパックも似たような表情をしている。こちらはよりギャグに近い表情であるが。

「なら、見ろ。こいつが、俺の剣だ」

ガッツが、己の背中に手を廻したその手に視線を這わせて漸く気付く。彼の背後に棒状の何かが突き出ている事を。まるで剣の柄でも突き出しているかの様なそれを、ガッツが掴んだ瞬間。

風切り音――形容しがたい音が聞こえて、それはその姿を現した。

「これって……剣、なの？」

それは剣というには余りにも大き過ぎた。

大きく、ぶ厚く、重く、そして大雑把過ぎた。

それはまさに鉄塊だった――。

最初、その全長を見てすらそれが何なのか見当がつかなかった。それほどまでにその物体は異質な存在だったのだ。凛の、そしてガッツの身長すら超えるであろう巨大な刀背と、彼女の頭よりも広い剣幅を持つ――そう、まさに鉄塊としか呼称しように無い武器だった。放出されるのは噎せ返る程の濃密な神性と呪い、先程の義手が普通の鉄に思える次元の濃さ。一体何を切り捨ててきたのか、致死と言うにも程がある怨念をも纏う大剣に畏れすら覚える。

「ああ、剣だ」

「振り回せるの？」

「ああ、良く振り回してた」

「なんていうか……規格外ね」

「そりゃどうも」

気負いの無い言葉と同時に、剣はまた風切り音と共にガッツの背中に収納される。巨大過ぎる事も然る事ながら、余りの神気の所為か天然の認識阻害が掛かっていたらしい。

改めて認識してみると理解出来るが、大剣は余りの濃さに呪いの次元にすらなりそうな神秘を纏い、純粋な致死の怨嗟をも纏わせている。並みの人間では抜いた瞬間に神

気の内圧差で吹き飛ぶか、怨嗟に誘われて自ら首を飛ばすだろう。一つ理解したのは、あれこそが宝具なのだろう。その英霊を英霊たらしめる伝説の武具である。そして、理屈抜きで理解した。彼は、下手な英霊など及びも付かぬ地獄の空気と親しむ剣士だ。神気と呪いを飲み下し殺意を吐き出す、最強を体現する存在だと。

「ガッツって言ったわね。貴方、この戦争を勝ち抜く自信は？」

「剣で斬れるなら、負けはしないだろうよ」

世間話をしている程度の自然な返答に、凛の口元には無意識に笑みが刻まれていた。これこそが当たりだ、掛け値無しの最強で立ち塞がる何もかもを粉砕する存在だ。

「では問うわ――汝、我が剣となりや？」

「そう言った堅苦しいのは苦手だ。だが……選択肢も無いんだろう？」

「いいじゃんか、聖杯とか言うのを使えば帰れそうだしー。それまでは世話になっちゃおうぜー」

それに昔は傭兵だったんだろ――パックの言葉はそれ以上続かなかった。ガッツは何もしていない。ただ一睨み、それだけで騒がしさが魂の底まで染み込んでいると言われる妖精が一言も話さなくなった。凛はパックの行動でガッツとの暗黙の了解を得た、それはガッツの過去を不用意に詮索しない事である。気絶しそうな殺気を浴びて学習した割には実りが少ないと思われるかもしれないが、これがあるかないかで、首と胴

が離れる可能性が劇的に下がるのであれば安い買い物だろう。令呪はサーヴァントに対して万能に近い。だが、令呪を起動させる術師は万能では無いのだ。そしてガッツの剣風であれば、令呪を起動させる余裕も与えずに命を絶つ事が出来る。後は、気軽に相棒の地雷を踏み抜く妖精さえ気を付ければ何とかなるだろう。しかしパックの言葉を信じれば嘗ては傭兵だったのだろうが、その過去を思い出す事すらしたくない程の拒絶はなんであろうか。少しだけ気になったが、その興味は抑え込んだ。好奇心は、九つの命を持つ猫すら殺し切るのだから。何にせよ、話は進めないとならぬ。凛は平静を何とか装い、口を開いた。

「互いの利益は一致するわね。ギブアンドテイクよ、貴方達は私を勝利させる。私は聖杯によって貴方達を帰還させる。これで、いいのかしら?」

「……呼び出された挙句、帰ることが報酬ってのも得は無いが――まあ、いい」

向こうでまだやる事がある、そう呟いたガッツの顔は見えなかったが、声色からして見えなくて正解だったのだろうと凛は理解した。殺気が飽和した声色にも、これから慣れないといけない事実は、常人よりも強靭な精神を持つ凛ですら意欲を減衰させるがやり遂げて見せる。そう決意して、凛は再び口を開いた。

「私は、凛。冬木の地のセカンドオーナで遠坂家の当主、遠坂凛よ」

「凛、か。俺達を戻すまで、精々死なないでくれよ?」

「そっちこそ、結果出してよ?」
「違いない」
予想され得る聖杯戦争の契約とは程遠いが、これで凛は参加資格を得た。此処から
が、日常と非日常の薄氷を歩みながら殺し合う聖杯戦争の本当の始まりであった。

4、初日―1

夢を、見ていた。

薄く淡やかな意識、か細い吐息の様な呼吸。簡潔に言えば、ソレは死に掛けていた。ソレにとって外界は恐ろしく広く、ソレにとって認識可能な内界は限りなく狭かった。辛うじて生き永らえているのは、未だ辛うじて繋がったままの臍の緒のお陰だった。母胎は木に吊るされ息絶えた状態だがどう言う奇跡か、ソレを文字通り地に投げ落としながらも微かな栄養と酸素を分け与えていた。人の祖は楽園から地に投げ落とされたと聖典に有るが、まさに楽園である胎内から地に産み落とされたソレの在り方こそが原罪を体現しているかの様であったとも言える。只一つで最大の違いは、彼等は投げ落とされて尚主なる存在に見守られていたが――ソレには何も無い。降りしきる細い雨の中、無数の屍体がぶら下がる木の根元で泥濘に抱かれながら、無為に己の拙い生命を消費し終えんとしていた。

そこに騎馬の一隊が通りかかったのは幸運か、それとも或いは不幸か。馬に乗る先頭の男が仲間と何かを話している。聞き取れた言葉は、異教徒や魔女狩りなどと言った単語。無論名前などある筈も、あったとしても理解出来よう筈も無いソレがその単語を

理解出来たわけではない。そんな中、泥を跳ね上げながら駆けてくる足音に体を抱かれた。女の様だが、意思の疎通が出来ている様にも思えぬ。男が何かを言い聞かせても、一向に応じる気配がない。業を煮やした男が抱きかかえた女の腕を跳ね上げ、敢え無く再びソレは地に転がった。

「――！」

意味を成さない叫びは、意味を成さないからこその原始的な本能に訴えかける迫力があった。叫びながら転がり落ちたソレ――胎児を掻き抱いた女に、男はこれ見よがしな舌打ちをし、そして女と胎児は運ばれて行く。人肌の柔らかさよりも冷たい泥濘の柔らかさ知り、物言わぬ屍体から生まれ落ちて死に満ちた世界から引き揚げられた胎児は、何処で何をして生きて行くのか。

そこで、目が覚めた。

★

「はい？」

「だから、無理だ」

起き掛けの遠坂凛と言うものは、基本的に優雅と言う言葉から此の世で最も縁遠い生命体である。余人には欠片たりとも見せないが毎朝が低血圧との闘争の歴史であり、

敗北の歴史でもある。詰まるところ、起き掛けの凛とは。

「その前にリンは、さっさと着替えて顔でも洗った方がいいんじゃないかなあ……なんかもー、使徒も真っ青な顔してるぜー」

と言う、遠慮と言う言葉を世界の何処かに置いてきたお気楽妖精種の一言に尽きる訳である。しと、と言う物体が何なのか凛には解らなかったが、自覚はある己の寝起きの悪さを比べられたのだから碌な物じゃ無かろうとはぼんやり理解した。そしてなんかもうどうでもいいや、とも。重ねて言うが、寝起きの遠坂凛とは優雅さを次元の彼方へ落としてきた様な存在であるのだった。全く頭が回らないこの状態は、確実に常の寝起きよりも酷い。気怠さ、吐き気、腹痛と言う諸症状はまるで月のモノの様にも思える。

「……取り敢えず、その話は、置いて、おくわ」

鉛の様に重たい口を無理やり開いて、文節ごとに区切る様に発音する。そうでもしないと舌が縺れそうなのだ。一歩一歩地面を確かめる様に洗面所へ向かって踏みしめていく凛。それを横目にして、ガッツにしては珍しく半眼でボソリと呟いた。

「……おいおい、あんなので大丈夫かよ」

その発言に微かにピクリと身体を震わせた凛は、心なしか足取りがしっかりした様に見えた。プライドに掛けて完全復活した完全体(パーフェクト)遠坂凛が降臨するまで、後数分の事である。

「最初の話に戻るわ。貴方、霊体化出来ないってどう言うことかしら？」
「漸く、まともに話せる様になったか」
「はぐらかさないで」
　凛の眼光に押される様な振りをして、顔を軽く背けるガッツ。無論眼は半眼、耳を小指でほじくると言うおまけまでついている。話したくない訳ではない、そも根本的に面倒臭い――声に出さずしてありありと分かり過ぎる態度である。こいつ、一度上下関係を脳味噌に刻んでやるべきか、と流石の凛がチラリとそう思ったくらいあからさまだった。
「うーん、オレは簡単にできるんだけどね。ガッツは……その、色々あるんだよ」
　消えたり現れたりしながら口を開く気が見えないガッツに変わって、パックが口を開いた。相棒を気遣うような、何処か遠慮気味な言葉の濁し方は実に妖精にあるまじき言動だろう。何も考えず、己の齎す結果も考慮せず、罪悪感など本能のレベルで持ち合わせないと父から聞いた妖精種とは雲泥の差である。気まずそうに眼を逸らすパックの視線がガッツの首元に注がれているような気がするが、それどころではないほどに思考を働かせる凛の脳内では深く気に留める事は無かった。
　エーテル体で構築されているサーヴァントは、非有体であるエーテルを魔力（マナ）を触媒として物質界に固定されている。つまり、魔力を燃料にしてエーテル密度を上げ

ることで擬似肉体を作り出しているのだ。術者にはその反動が急激な魔力枯渇と言う形で現れる。思えば今も感じるこの体調の悪さは、急激に魔力を消費しているからであろう。女性につきものの月のモノに症状が似ていたのも理解できる。体内にあるいらぬモノを排除する一面も持つ月経は、異物である魔力回路と著しく相性が悪い。お陰で魔力が一時的に減衰するのだ。即ち今の現状と一致する。詰まるところ常時一定量の魔力を消費されている現在の状態は、正常であるのだ。で、有るならば霊体化に戻る事が出来ないはずがない。寧ろ星幽体化（エーテライズ）している状態が通常であるエーテルが、物質化（マテリアライズ）を解除出来ないと言う不可逆性が発生すること自体がおかしい。

「何か思い当たる節は無いかしら。貴方達がエーテライズ出来れば、私の負担も少しは減るわ……儀式後で本調子じゃないのもあるけど、正直な話こんなに魔力を吸われるのは計算外なのよ」

「知らねえな」

間髪入れずに返ってくる答えは、鉄壁の如き拒絶を纏っていた。鉄の如き拒絶と圧力を発するガッツを見て、それだけで聞くことの無意味さを悟る。密室の殺人現場があったとしよう。目撃者は居ず、コンクリートの床と部屋の壁のみが真実を知っている。では、その床に尋問をするか？壁に事情聴取をするか？それと同じことだ――鉄は言葉を語らない。

「用がそれだけなら、もう少し寝かせてもらうぜ」
「ちょっと、話はまだ……」
「リン、寝かせてやって？アイツ、こんなにまともに寝られるのが、久しぶりなんだ」
　止める間もなく蹲るガッツを好い加減叩き起こそうと、叩き起こすには充分だが後遺症を残さぬと言う細心の注意を払った呪い（ガンド）を放とうとした矢先にパックに止められた。エーテル体に睡眠が必要とは思えないが、成り立ちの奇妙な存在である彼らにはそうでもないのかもしれない。因みに、マテリアライズしているガッツを起こすためにわざわざガンドを使おうとしたのは、何も八つ当たりであるわけではない。変に手を出すと反射的に叩き切られかねないと言う、結構洒落にならぬ予測が脳内を過ぎったからである。重ねて言うが、八つ当たりなどではない。
「こんな状態で、本当にコイツこそ他のサーヴァントと戦えるのかしら……」
「オレはサーヴァントってのがどんなものかイマイチわかんないけど、多分大丈夫じゃないかなー？」
　何を根拠に、と鼻を鳴らした凛を見てニシシと呑気に笑うパック。一体どんな修羅場を潜ってきたかは知らないが、随分と信頼のあることである。
「で、アンタも思い当たる節があるみたいね？」
「なんのはなしかなー」

「色々突っ込みどころはあるけれど、誤魔化す時は最低でも棒読みになっちゃいけないわよね?」
「肝に命じます……」
目を泳がせて口笛を吹きつつ棒読み返事、と言う疑わし過ぎて逆に罠を疑う次元である挙動不審さのパックを、ガッツの先例に倣ってひっ捉えてにっこり親愛を込めて笑いかける。ついでに今後に役立つ建設的な意見を教えたのは親切心の発露と言うべきだろう。左手にパックを握りしめ、右人差し指をパックのこめかみに当てているのはちょっとしたお茶目である。決してガンドを撃つ用意をしているわけではない、誤魔化そうとした瞬間に当ててやる気など以ての外だ。
「あ、あくまがい……イエ、ナンデモナイデス」
「ええ、私も何も聞かなかったわよ?」
「こえーよー、ガッツぅー。むぅ解ったよ、多分の予想だぜ?ガッツの左首見てみ、それだけ」
それ以上は頑として口を開かない。ガンドを発動寸前ギリギリまで魔力を指先に込めてみたが、それでも口を開かない時点で諦めた。これ以上は、流石に冗談では済まないだろう。左手を開くと、へろへろと落ちていくパックに目をくれず――蹲り、黒いマントに身体を埋めているガッツの左首に視線を向けた。

確かに妙ね、少しだけガッツを凝視してそう結論付けた。パックの言った首筋は隠れて見えない、凛が見たのは魔力の流れである。他人の魔力の流れを視覚化することは、事前に何らかの準備をしなければ不可能ではないが困難ではある。それを数秒で把握出来たのは、凛とガッツの魔術的関係が現状はともあれ魔術的に主従契約を締結している点に尽きる。ガッツは凛の魔力と聖杯の魔力で現界している。聖杯からは高次元存在である英霊を、エーテル体として位相の低いこの世界に自我を固着させて存続させる為の魔力を。契約主である凛からはある程度の聖杯からの独立性自我（スタンドアローン）の確立と、物質界に働きかける為の諸処の燃料としての魔力を。つまり凛自身とも言える魔力は、ガッツの全身を巡っている。その魔力の流れを通じて、大まかな流れを掴んだのだ。その結果。

魔力が左首で凝ってる……いえ、吸い込まれている？凛の脳裏に浮かんだイメージは、奈落の穴である。左首に空いた穴から止めどなく魔力が流れ落ちていくような。

「道理で際限なく魔力を喰われる訳ね。何かは知らないけど左首にある何かが私の魔力を奪ってる。もしかして、これがエーテル体になれない理由？」

「多分ね、オレも詳しくは知らないけど。ガッツも話してくれないし、聞かなくていい話もあるし」

けほけほと喉を鳴らしながらパックが同意する。つまりは、詳しいことを聞きたけ

れば本人に聞けと言うのだろう。何にせよ、これは明確な欠点でしかない。何とか良い方法が無いかと解析を進める。学校なぞ、とうの昔に登校する気はなくなっている。具体的に言えば、昨夜の召喚の儀辺りから。

「奈落の穴の様に見えるけど、違うわ。穴にしか見えないほど濃密な呪い……いえ、祝福？何にせよ構成が緻密で濃密、呪式と言うより何かのら塊にしか見えないわ」

「……コイツが、理解出来るのか」

「あら、起きてたの？いつまでも狸寝入りしている奴に教える義理は――ひ……っ」

「死にたくなきゃ、さっさと言え。こいつは何だ、こいつは消せるのか、あの野郎は」

何処にいる――そう言ったガッツは少なくとも人間と言う存在を数段程踏み外していた。お陰で寝ていた筈のガッツの唐突な言葉に意趣返しを込めての返答をしようとした筈が、遠坂凛にはあるまじき声が出てしまった。だが今はそんな些細な事など一考にも値しない。凛の胸倉を掴み上げたガッツから溢れ出るものは、濃密な殺気。凛に向けられた隻眼は目の前の凛も何も映していない。そして曲りなりにも僅かとは言え存在した親愛の情など、欠片も一単位たりとも存在しなかった。昨夜がまるで児戯であるかのような殺意。確かに昨夜は、薄氷を渡るかの様な神経を鑢で削る様な緊張感があった。その例えで言えば今は八胴と評された斬れ味を持つ白刃の上で、赤子の如き柔肌で爪先立っていると言えば良いか。言動一つではない、微かな動作が死に直結する。

身体の反射行動、一筋の汗すら容認されないだろう。しかし視線だけは強く、強く目の前の男を見つめて口を開く。その眼光にガッツが少しだけ、たじろいだ様に見えた。
「っ、順を追って説明するわ。一つ、その首の何かは祝福された呪い……としか理解出来ないわ。二つ、消せるかどうかは私には無理ね。余りに理解が及ばな過ぎて、完全な解析だけでも時計塔の施設をフルに使っても百年単位は必要だわ。最後、それが誰の事か私には分からないわ」
「ガッツ、リンは全く関係ない奴だって判ってるだろ?!手を離してやろうよ……!」
「……チ」
　微かな舌打ちと共に凛の胸倉を掴む手が離れる。凛の眼光から目を背ける様にして、脱力したように座り込んだ。その様はまるで別人、怒りや憎悪で溢れかえった地獄の釜の様なエネルギーに満ちていた数瞬前が、座り込んだ今は人生に疲れきった死を迎える寸前の老人の様だ。
「リン、大丈夫?痛いトコロとか無いか?ガッツ、リンに謝れよ!」
「……済まん。少し、興奮しちまったらしい」
　凛のあちこちを飛び回りながら心配しているらしいパックに、礼を言う事も頭から吹き飛んだ。ガッツが、非を認めたと言う事実が余りに非現実過ぎたのだ。こいつ、謝れたんだと思う凛も大概だが、出会って一日だが謝罪一つでここまで仰天されるガッツ

も大概であろう。
「ま、まあ滅多に見られそうもないものを見たから、不問にしとくわよ！別に、許したわけではないからね？間違えないでよ!?」
「リン、何か赤いけど熱でもある？」
「総天然色愉快型妖精は黙ってて？」
「あれ、オレってリンの心配してたのにこの扱い？」
　あー、もう！と頭を抱えながら凛は叫び声を上げた。人目がなければ更に掻き毟っていただろう。常に優雅たれ、と言う代々のモットーが辛うじて効力を発揮した成果だが、既に余り意味はないとも言える。
「ま、いいや……。で、結局オレ達をエーテル化だっけ。そうさせて何する積もりだったんだ？」
「そう、それよ！……参加報告に行くのよ、教会にね」
　パックの声にそう答えた凛の表情は、御世辞にも晴れやかとは言えるものではなかった。

5、初日―2

「結局、オレだけ連れてくのって……正直何の役にも立たないぜ?」
「解ってるわよ……」
　いや、ここは我がエルフ示現流の出番か否か!などと木の枝にイガグリが付いたモノ、としか形容できぬ謎の物体を構えて妄言を吐いているパックの姿はどう見ても戦力になるように見えず、凛は思わず天を仰ぎたくなった。未だサーヴァントの数が揃わない故の準備期間とは言え、開幕前の不文律などを守る程行儀の良いマスターばかりとは思えない。いや寧ろ、確りと開幕前の戦闘行為の隠蔽策を練って必殺を期して行動を起こす位のことはするだろう。主義に合わない為に取らなかったが、仮に凛ならばそうする。目の前に聳える、神の家とは名ばかりの威圧的な建物の前で溜息をもう一度。門の横には教会にはありがちな木の大きめな表札に、建物名が刻まれている。冬木教会、其処にはそう刻まれている。
「でもさー、なんで教会なんかに用事があるんだ?基本的に迫害とかしかしないと思うんだけど、魔術師なんて存在」
「そうね、間違ってはいないわ。唯一神を信仰してそれに拠らない奇跡を異端とする教

会と、私達魔術師は言わば不倶戴天。倶に天を戴かない処か、連中からしてみれば肉片の一欠片すら消滅しなきゃ気が済まない位ね」

「どこもやっぱり、似たようなもんなんだなあ……」

凛の言葉に、何を思い出したのか遠い目をするパック。尋ねようとしたが、止めた。彼等の来た世界と時代は恐らく、此方の世界で言う中世暗黒期と言えるだろう。凛とて学校では優等生で通る才女である、ガッツの鎧の形状やあの巨大な鉄塊剣で多少の察しは付く。場所によっては皮革を使用し重要な部分は金属を使用した、機動性と耐久力を高いレベルで実現しているあの金属鎧の構造は中世期であればこそだろう。それ以前では金属の精錬技術の問題があるし、それ以降では銃器の発達による極端化が進む。重装では戦車、軽装であれば歩兵である。技術の発達で近年は双方を実現した防具もあるらしいが、その辺りは凛の知識外である。剣にしても、あの手の大剣は馬上で勢いを利用して振り抜くモノと聞いた事がある。あれを己の膂力でのみ振り抜くであろうガッツが、凛には仮にも同じ生物カテゴリーにいるとは思えない。

ともあれそう言った理由から彼等のいた時代背景を予想したのだが、当たっていれば今の比ではない宗教弾圧振りであろう。今でこそ教会――聖堂教会も外面は大人しくなった。かつては歴史に見る通りの凄惨な弾圧で屍山血河を、それこそ中世期を最盛期として築いてきたのだ。まあ、今は代わりに内部で更に先鋭化しているのだが。

「教会に行くのは、監督役がいるからよ。この戦争の、ね」
「はて？しょーじき、戦争に監督役がいる理由が良く分からないんだけど」
「聖杯から情報もらってるでしょう？」
「何だろう……なんか凄い曖昧としてるんだよね。自動車とか見ても驚かない自信はあるんだけど、肝心の戦争の部分が良く分からないって言うか？」
「……どう言う事、かしら。聖杯から情報が取捨選択された結果にしては、おかしいわね？まあ、今は取り敢えず置いておくわ。監督役の事だったわね」
　感じた疑問は脳内で要検討の棚に入れ、凛はパックに彼女の世界の基本的な情勢について解説し始める。魔術は秘匿されて然るべき、これは魔術師であれば常識以前の話でもある。魔術は神秘が高ければ高い程その価値を真価を跳ね上げる為、魔術師を総括する魔術協会はその使用規制を徹底してきた。魔術師に広く浸透している研究と研鑽こそが第一義であると言う印象も、協会の拡めてきたプロパガンダが大きな役割を果たしている事は否めない事実であった。其処には魔術の劣化を防ぐと言う魔術師としての尊厳に多分に影響する大前提が歴然として存在する為、誰もが疑問に思わない事でもある。更にそれとは別に、もう一つ重大な理由がある。
「それが、教会との関係よ。教会は私達を常に異端と見なしている、何時だって私達を捻り殺したいと手薬煉引いて待ち構えてるわ。やらないのは、他に優先して討伐する存在

がいるからだけの事よ」
「うえ、俺達のトコの宗教も大概だけどこっちも酷いねー……」
「どこの世界だって、人間が考えることって変わらないって証左よね。嫌な話、だけど」
　更に凛は話を続ける。何かしらの異端の業を使って起こり得た事件は、教会による攻撃理由に十分過ぎる程該当する。それは無論、魔術を使用した事件であれば事の本人を如何なる理由があろうとこの世から抹消する、と言う事でもある。これらの出来事を発端とした流血の争いは、ひっそりとしかし確実に世界の裏で連綿と続いてきた。そうして何時しか協会と教会に暗黙の了解が生まれる。協会は非合法の魔術実験の禁止と、実行者及び協会登録外の魔術師の安否に関して一切の保証をせず、教会側の要請があれば審議の上で情報提供を拒まない事。教会は、協会所属且つ協会規定に則った行動を行う魔術師に対する攻撃を行わず、双方に理のある儀式が行われる場合には儀式が円滑に進む様、儀式の監督役を派遣して儀式の履行に務めると言う物である。
「つまり、この戦争は教会側にとっては理由の二つ目に当たるわけよ」
「ふーん、よくわからなかったけど取り敢えずわかったよ」
「……あのね、正直は稀に不幸な軋轢を生むのよ？」
「ゴメンなさい、分かったから掴まないで握らないで中身が!?」
「……神の庭で、随分と騒がしい事だ。何用かな、凛よ」

世間を知らない哀れな妖精に、体罰と言う名の教育を施していた凛の背に掛けられた声に、二人は揃って口を閉じた。余人が聞けば静謐さをも秘めた深きから響くが如き重々しい声は、神の庭で騒ぐ愚者共を窘める。だが余人ならぬ遠坂凛にとってこの声は、不快さを内に飽和させた深淵から覗く怪物が如き、聞き慣れた声である。

「この時期に来るんだから、要件なんて一つしか無いわ。召喚したわよ、綺礼」

「ふむ。立話する内容でもあるまい、中で聞こうか」

冬木教会の主、聖杯戦争監督役、そして凛の兄弟子でもある男、言峰綺礼が其処にいた。ガッツに匹敵する長身をカソックで固め、胸元に虚しく揺れるのはロザリオ。無作法に伸びた襟足が長めの艶の無い黒髪は、あまりに簡素な格好と極まってある種の清潔さをも感じる。凛と、エーテル化して消えている筈のパックを一瞥した綺礼は踵を返して両開きの扉を潜って行く。

「なんだ、アイツ……まるで何も無いみたいだ」

怖い、とポツリと呟いたパックはそれきり再び黙った。何かしらを感じ取ったのだろうか、と凛は推測する。何をと言われなくとも凛がいつも何処か感じていた違和感である、説明されずとも分かる。凛がいつも感じている、あの男の中身が伽藍洞である様な錯覚だろう。エーテル化により不可視になったパックに合図を出し、綺礼の後ろに付いて行く。背後で閉まった扉が、やけに大きな音を立てて閉まった様に思えたのは緊張

からだろう、きっと。
「さて、凛。詳しく聞かせてもらおうか」
「詳しくも何も、サーヴァントの召喚には成功したわ。それに令呪もある。参加認定に不備は無い筈よ？」
「流石は我が師父の子、と言った所か。お前は確かに優秀な魔術師なのだろうな。召喚したクラスは？」
「無論、セイバーよ」
「剣の英霊か、確かにお前の性根らしい英霊だな」
「貶してるつもり？」
「真逆、褒めているつもりだが？」
「貶された方がマシだったわ、寒気がしてきた」
　案内されたのは告解室。その狭い暗がりの中で、凛と綺礼は静かに話し合っていた。相も変わらず皮肉や暗喩のセンスだけは随一ね、凛は内心でそう呟いた。告解室は神父に、神に、己の罪を告解し、曝け出す場である。そこで語られた内容は、神と代理として耳を傾けた神父のみぞ知る。それはまさに監督役に戦争参加と言う業を告げる今の自分の姿であろう。その性質から、古来から秘密の会話と言う物は教会圏に限らず大抵は告解室で行われる物なのだ。それは一つの様式ですらある。

「それで、参加は認めるのかしら？」
「凛よ。私は師父よりお前を頼む、と
託された。そのお前がこうして師父の敗れし戦争に参加するのは――最早因果であろう。であるならば」
私は、それを受け入れなければならぬ。その言葉を発した瞬間に、凛には綺礼の顔から何かが抜け落ちた様に見えた。少しの間影となって見えなかった綺礼の顔は、その間に凛の知らぬ顔の男となっていた。其処にはもう、後見人として遠坂凛の世話をした兄弟子は存在しなかった。其処に居るのは、言峰綺礼と言う名の聖杯戦争監督役。彼女の記憶にあり、また同一人物であるが、彼女の記憶には無い男であった。その見知らぬ男が、虚の洞の様な口を開いて問い掛けた。それは、正しく覗きこんだ深淵の底からの問い掛けであった。
「汝、遠坂凛。如何なる理由で聖杯を欲さんとす」
凛の根源を晒す問い掛けであった、更には数少ない父親の記憶に残る傷口を曝け出す問い掛けでもあった。だが、その手には乗らない。目の前の男が遠坂凛の知らない言峰綺礼であるが、その本質だけは変わり様が無い事を彼女は確信している。だから、こう答えた。
「別にいらないわ、私の力量さえ判ればね。それに」

――わざわざアンタを悦ばせる様な事を言う訳ないでしょう？

そう言って薄く微笑む凛の顔は、それこそ魔女と言ってもおかしくは無かっただろう。人間性の違いなど百も承知であったが、同じ遠坂の一門である以上は何処か似る物があるのだろうと他人を納得させる表情だった。深淵からの魔人と赤い魔女の対峙にも見えるこの構図は、かなりの修羅場にも一般的エルフ以上に慣れている筈のパックの心胆を寒からしめたのだから相当な光景だったに違いない。

「宜しい、遠坂凛――君を聖杯戦争の参加者と認めよう。存分に他の参加者を踏み躙り、蹂躙し、喰らい尽くし、飲み干すが良い」

「遠坂はそんな下品な真似はしないわ、知っているでしょう？常に、優雅たれ。これこそが遠坂よ、喩えそれが御父様の足を掬ったかもしれないとしてもね」

「よくよく面白さが失せる発言ではあるが……いつまでそれを保てるのか興味もある、頑張ってくれたまえ。もし令呪とサーヴァントを失い、戦争参加資格を失った場合は規定により教会が保護しよう。命を失う前に辿り着く事だ」

「肝に命じておくわ。で、これで全て揃ったの？」

「いや、まだだ。後一騎足りていない。それが召喚され次第、聖杯戦争は開始される」

聖杯戦争は七騎のサーヴァントが召喚されなくては始まらない。形式では無く、これは純粋にシステム上の問題である。七騎のサーヴァントと七人のマスターを必要と

する儀式大魔術が聖杯戦争、揃わずしては聖杯には誰も至れない。
「もうすぐ、ね」
「ああ、用意は怠らぬ事だ。自らを助ける者を、主は助ける」
「あら、まるで真っ当な神父みたいなこと言うじゃない」
「何を言う。私は誰よりも神を信じ、誰よりも敬虔な信徒であると自負している」
　直向きと言っても良い眼差しで語る綺礼に、狂信的な何かを見た気がした凛は頭を振って脳内を切り替える。少なくともどれだけ人間として終わっていても目の前の男は監督役である、参加者ではない以上敵では無いのだ――例え、過去に何があったとしても。
「じゃあ、報告も終わったし帰るわ。結果を楽しみにしてるといいわ」
「ああ、願わくば次に会う時にはまともなサーヴァントを見たい物だな」
「……肝に、命じておくわ」
　踵を返した凛の背中に、綺礼の声が突き刺さる。先程と同じ返事を返した凛だが、内実はとても同じとは言えなかった。内心の動揺を全く見せない足取りで教会を出ていった凛は、教会が見えなくなった辺りでぼそりと呟いた。
「何故、パックが本命のサーヴァントじゃないとわかったのかしら」
「うわあ、息が詰まった……へ、どう言う事？」

「簡単な話よ。サーヴァントは基本一人に一騎、確かに貴方は綺礼の言うまともなサーヴァントには見えない。でも、だからと言って他にサーヴァントがいるなんて発想には用意に結びつく筈が無い。まるで……」

「まるで?」

「……いえ、流石に考え過ぎね。少し物資を買ってから戻りましょう、戦争開始までもうカウントダウンが始まるわ」

思い付いた言葉を飲み込んで、足取りを早める。教会で全く口を開かなかったパックが、此処ぞとばかりに騒ぎ出すが歯牙にもかけずに歩いていく。それを追うパックの非難と疑問の声を聞きながら、凛は脳裏を掠めた考えをもう一度検討して辞めた。馬鹿げてる、まるで複数のサーヴァントを召喚したことがある様な素振りに見える、なんて。可能性をもう一度試算するが、あり得ないと言う結論に再度達した。

可能であるかどうかを抜きにして、という前置きが必要になるが、条件としてそれを行うにはまず聖杯のシステムのかなり根本の部分を改竄し、更に改善する必要性がある。そして更には、その余剰サーヴァントを生存させる為の魔力を聖杯から供給しなくてならない事になる。幾ら聖杯とは言え、そこまでの余力は無いだろう。この推論に関しては、当て推量であるとは言え、ある程度の根拠は持っている。そんな余力があるならば、わざわざこのような回りくどい方法を使って聖杯を起動させる筈も無いと言う身

も蓋もない結論だが、ある種の真理は突いている自信もまたあった。そしてそれはそのまま、不可能と言う結論に帰結するより他は無い。そうしてこの思考は、帰宅する頃には脳内から消え失せていたのであった。

6、初日―3

「おい、何だこれは」
「サーヴァントの癖に、何故かエーテル化出来ない誰かさんの為の苦肉の策よ。昼間、その格好で動き回るわけには行かないでしょう？」
　胡乱げな目をしたガッツの言葉に、凛は鼻高々に言いのけた。陽も暮れた頃、軍資品を買ってきたと帰宅して早々に凛が取り出したのはどう見ても服であった。出掛けた間に鎧を脱いだらしいガッツの体躯は、矢張りと言うか傷だらけであり歴戦の兵と言う風格は確かにあった。そこに凛が取り出したのが、サイズ特大の迷彩柄カーゴパンツに黒いシャツである。鎧無しですら尋常ならざる威圧感を放つガッツに着せた瞬間に、様々な意味で破壊力が強過ぎる一品となる事は間違いないだろう。凛としてもわざわざ選んで買ってきたわけではなく、ガッツの体型で着衣可能な服がこんなモノしか無かったと言う身も蓋もない現実的な理由からの選択だったのだが、ガッツの反応に我に返り正直早くも後悔し始めてきた。世にも珍妙なモノを見る目付きでつまみ上げた服を眺めるガッツにしても、何か言いたそうな表情である。
「……何よ、言いたい事があるなら言いなさい？」

言外に、苦情は聞くだけ聞くけど基本無駄よ、と言うニュアンスを匂わせながらも形だけ問いかけた凛に対するガッツの返答は、予想の斜め上だった。
「敵がいねえなら、昼は寝てりゃいいだけの話だろう？」
「何処のニートよ、アンタ……」
がっくり、そう形容するに相応しい脱力振りを見せた凛は、ガッツに対する能力評価を下方修正した。株価でいえば下げ止まらない状態でもある、底値も最早近い。何時の間にやら、二人称も貴方からアンタへとランクダウンしている辺りからもその辺りの心情が伺える。
「こっちの世界でも、こんな冬の時期には何やら羽織るんだろう？なら、其れで充分だ。忘れているのか勘違いしているのか知らねえが、俺の武器も防具も呼べばやって来るような便利なものじゃねえぞ」
詰まるところ、その格好で敵に遭遇しても十全と言い難い状態での戦闘になると言う申告だった。それは不味い、己の失策で足を掬われるのは全く勘弁である。そう考えれば、ガッツの言葉には一理も二理もあった。だからと言って、昼間は寝ているというのは当たり前に却下だが。凛は戦争する為のサーヴァントを召喚した訳であり、夜も寝ずに昼寝する様な役立たずを召喚したわけでは断じてない。
「そうよね、装備の問題があるのよね。本当、悪い所ばかり規格外だわ」

エーテル化と物質化により、非戦闘状態と戦闘状態を切り替えるのが基本的な聖杯戦争であると聞いたが、それすら覚束ないわけだ。戦闘になれば完全な装備状態で物質化出来るであろう他のサーヴァントと違い、あくまで現実に即した行動しか取れないガッツが凛の買ってきた服で戦闘に臨めば――文字通り徒手空拳で戦う事になる。これは凛でなくとも辛辣な言葉は出るだろう、寧ろ他の魔術師と比べれば優しい扱いであるかもしれない。

魔術師とは閉じた世界の住人である、そして得てして歪んだ自尊心を持ちやすい傾向にある。少なくとも一般的には人格の高潔と言われる人間が魔術師となった場合、大抵は劣等の評価を免れぬ事は出来ないだろう。どんな環境であれ、閉じた世界は空気が淀む。淀んだ空気は人を歪めるものである、それが閉じた世界をこそ容認する環境であれば名分を得て加速していく。その典型であり、その末路を凛は身近で知っている。奴であれば、鎖で以てサーヴァントを飼うつもりであってもおかしくは無い。まあ、それ以前に参加出来るとは思えないが。

「アンタがどう思おうと構わねえよ。やる事が無いなら、俺は好きにやる」

「待ちなさい、無い訳が無いでしょう?」

何をするつもりか大剣を担いで出て行こうとするガッツを、腕を掴んで引き留めた。実際は引き止めるどころか、若干引き摺られてからガッツが止まったというのが真相で

ある。引き摺ってから漸く気付いたとばかりに視線を向けられた事に、凛としては色々と言いたい事があるが今は置いておく。
「街に出るわ、準備して」
「あん？」
「アンタのその武器、それだけ大きいと狭い所だと不利でしょう？少しでも有利に戦える場所を見繕うのは無駄じゃないわ」
　セイバーたるガッツの戦闘能力が不明な以上、土俵だけでも此方の土俵に引き摺り込みたい。その為の偵察という事である。能天気に、むむむなるほど！などと声を上げているパックは既に空気の様な扱いである。差し詰め、賑やかなポルターガイストとでも表現すべきであろうか。そして本命たるガッツは暫し凛を見つめ、ふん、と鼻を鳴らして鎧を付け始めた。片手の義手を物ともしない手早い装備である。普段が全くやる気のない様子である所為か、やる事はやる様であるその姿に凛は少しだけ安堵した。
「まずは、そうね……新都辺りでも行ってみましょうか」
「任せる、土地勘は全く無いんでな」
　背に大剣を背負い、全身を隈無く黒いマントで覆ったガッツが凛の言葉に答えた。そのガッツの姿に、夜とは言え人目には注意すべきだと改めて実感して凛は扉を開けた。大体にしてよく考えると視界に入れなくても圧迫感を感じる様な男がだ、見た目を多少

変えた処で目立たなくなる筈が無い。それならば逆に余計な事をしないこの方が良かったのかもしれない、と背後からの威圧感を受けながら凛は脱力感と共に己を無理やり納得させた。

「そう言えば、天井直しておいてくれた？」

「あん？俺にあんなもん直せるわけないだろうが」

「せめて少しは頑張って見たけど、くらいの振りはしてくれないかしら」

静かな住宅地の夜道を歩きながら、教会へ行く前に頼んでおいたことを確認する凛に、きっぱりと何の衒いもなくやってないと口にするガッツ。聞いた方も答えた方も互いの認識に齟齬がない会話だが、そこにあるのは信頼関係とは真逆であると言うどうにもならぬ空気であった。しかし、最初の召喚時のあのギスギスとした空気からはかけ離れた物でもある。そう言った意味では、主従はともあれ関係としては悪い物ではないだろう――その事に凛は密かに安堵していた。下手な地雷を踏み抜かなければ、この関係を維持する事は難しくない。後は戦闘能力の確認が取れるならば、他のサーヴァントへの対策も立てられるだろう。凛が出来る事は前衛としてガッツが飛び込んだ背後から補助をする位の物であろうが、ガッツの行う戦闘の流れの端緒でも掴めれば連携を取る事も不可能では無い筈である。

まずは、歩きながらでもガッツの能力を具体的に確認すべきだろう。良い方法は、と

考えて見ると、確かシステムの補助でサーヴァントのステータスが見られる筈である事を思い出した。同時に今の今まで確認していなかった己の不首尾に気付いて、凛の顔が赤くなる。唯でさえ召喚時間のミスと言う、初手で行うには最大級の失敗をしているのだ。思いつかなかったのは召喚後で体調が悪かった、など死ぬ可能性の前には欠片の言い訳にもならない。因みにパックは霊体化と念話が出来る特性を生かして、現在斥候中である。しかも激しい感情を持つ存在がいると可視不可視に関わらず感知出来ると言う、精神感受能力を持っていることが冬木教会で明らかになった。世の中何が役に立つかわからない、当人は最後まで嫌だ嫌だと反対していたが。そう言った理由もあって、周囲の警戒に意識を過剰に割かなくて良い状況は凛の精神に多少のゆとりを齎していた。

サーヴァント、ステータス、と段階的に意識を移動させて見ると脳裏に見慣れない画面が浮かんでいた。これがステータス確認という事だろうか、物の話に聞くゲーム画面とやらに似ている様な気がする。

一番上の項目はクラス名、セイバーと表示されている点で間違いない。次に真名の項目、ここにはガッツと同時にパックとも書かれている。聖杯はこの二人を併せて一体のサーヴァントと認識している様である。でなければ、凛は一人でサーヴァント枠を二つ使っている事になってしまう。その下はマスター名、無論だが遠坂凛の文字が記載され

ている。よくよく考えて見ると、サーヴァントの確認など最初からこの機能を使えば良かったのではないかと気付いたが後の祭りである。どうも凛は、この手の文明の利器とやらに通じる機能全般が苦手なのであった。更に項目を進めると、身長体重性別などの身体特徴欄、属性が記載されている。そして、ある意味本命であるパラメータの欄。筋力から始まる六項目が、アルファベットで格付けされて表示されている。

「見た目通りではあったけど……ここまでとは思ってなかったわね」

言葉に表せない、と言う態で凛は漸く口を開いた。確かに体型的にも武器的にも低いとは思っていなかったが、真逆筋力がＡ＋などと言う化物染みたステータスだとは思っていなかった。耐久と敏捷がＢもあると言うのも、かなりバランスブレイカーではないかと思われる。確かに敏捷に関しては既に凛は召喚時に体験して身に染みてはいた。危なく、命を等価交換に持っていかれる処だったが。だが、残りの項目である魔力がＥで幸運がＤと言う惨状に、凛としては先程とは逆の意味で言葉が出なかった。何があったかはわからないが酷過ぎる。対魔力スキルがあると言われるセイバーなのに、魔力が最低ランクとは一体何の冗談なのか。

「アンタの人生に、俄然興味が湧いてくるようなステータスね」

「知らねえな」

相も変わらずこの態度であるが、流石に慣れたので特にそれ以上追求もしない。下手

な事で虎の尾を踏むのは勘弁である。パックに方向を指示しつつ到着したのは、教会に向かう際にも渡った大きな橋の袂であった。冬木大橋、新都と深山町を分ける未遠川に掛けられた橋である。

「この辺りなら多少は楽に戦えるんじゃないかしら？」

「剣振るだけなら、まあな」

「煮え切らない返事ね、他に何か攻撃方法があるの？」

さあな、と肩を竦めるガッツ。良い加減、秘密主義も大概にして欲しい物である。ステータスのスキル欄も、当人の許可がないとロックが掛かっているらしく見る事ができない。つまりは戦略が立てられないと言う事にも繋がる。最もスキルについては、当人もどうやらよく理解していないらしいと言うのが実際の話の様だ。例えば己の戦闘経験の内、一体何がスキルに該当するのか、と問われて見ると確かに分からない。実際の経験と文字で見るステータスの括りは別の物である事は、凛も理解している。その経験や特技の中でもより顕著な物を、スキルとして聖杯が取り出して表示しているに過ぎない。それを聖杯のシステムサポートで各々のサーヴァントがスキルと認識しているとするならば、何故か聖杯からのサポートがちぐはぐなガッツやパックが理解出来なくても仕方ないのかもしれない。

「ま、パラメーターが分かっただけでもかなりマシだわ。少しはセイバーの実力も信頼

できそうよ」
「勝手な野郎だ」
「あら、野郎は無いんじゃないかしら。これでも私は女なんだけど？」
「知るか」
　橋の袂の小公園で言い合う男女、そこだけ抜き出して見ればある意味ロマンスだが、ガッツの風体が何もかもを裏切る程に胡散臭い。一昔前なら人攫いなどと間違えられそうである。そうで無くとも凛の格好は配色的に目立つ。黒尽くめのガッツはまだ幾らか夜闇に隠れそうだが、凛の格好は赤を基調としている。一ヶ所に留まらない方がいいだろう。
（リン、何かが凄い早さで来る。何だろう、凄い……怖い！）
「……っ！」
　緊迫感を帯びたパックの念話が、弛緩した雰囲気を一気に引き締めた。それと同時にガッツの小さい呻き。見れば、首を抑えて顔を顰めている。何か攻撃を受けたか、と一瞬考えたがそうでもなさそうだと判断した。パックの感覚は、綺礼を見た時の一言で一考するに足るだけの物だと凛は思っている。尋常じゃない早さでの移動と言う報告も加味して、パックが発見した相手は恐らく他のサーヴァントだろう。問題はその行動である、つまり目的は何だろうか。開戦前の攻撃は基本的に厳禁となっている、その為問

題行動を起こすまでは基本的に手が出せない。始まりの御三家と呼ばれ、この地を管理する遠坂家としてはあからさまなルール違反をする気にはならないと言うこともある。向こうは一体どういう行動を取ろうとしているのか。その思考を念頭に、パックに連絡を取る。

（パック、気付かれてる？）

（それは大丈夫みたいだけど……猛烈な勢いで走ってる）

（どっちの方向？）

　そうしてパックが示した方向を聞いて、凛は脳を全力回転させる。ガッツが凛の変調をガッツなりに察したらしく、此方を伺う様な空気を凛は感じるが返答する余裕は無い。一体何処からか？それは、確実に新都に拠点を持つ者の手だろう。凛の拠点である深山町から冬木大橋に移動したのは夕方から夜に掛けて、新都方向と深山町を結ぶ地点は基本的にこの冬木大橋以外には無い。その間に深山町から新都へ、新都なら深山町へ移動したサーヴァントはいない。いれば、パックが反応を見つけているだろう。また、凛へ何らかの干渉をしてきた筈である。何しろ凛のサーヴァントはエーテル化出来ない、他のサーヴァントにとっては闇夜を照らす灯台の様に目立つだれう。そして、魔術師の行動時間は基本的に夜である。神秘の隠匿と一般人への被害や干渉を最低限に抑える事が出来るのが夜である為だ。事を大事にすれば教会からも協会からも処刑人（エグゼキューター）

が派遣され、最終的に行き着く先は優秀さによって変わるが命は彼岸行きなのは間違いない。つまり相手が昼に事を荒立てる程の先の見えない馬鹿でなければ、以上から前述の過程が成り立つ事になる。更に走っていると言う報告から、物質化つまり現界して移動している処を見ると、その事自体に何かの要因が絡んで来るのかもしれない。無論、ガッツの様な根本的にどうしようにもない理由も可能性としてゼロではない。

「セイバー、あの仮想敵を追って私を抱えて全力移動。パラメーター的には問題無いわ、その方が確実に早い」

「……ふん、文句は聞かねえぞ」

そこまでの思考で凛は、躊躇無くガッツに〝命令した〟。それに対してガッツは文句を言わず凛を持ち上げる。凛の危機感が通じているのかは分からないが、そのまま肩に担ぎ上げるガッツに多少の文句はあったが素直に担がれる。くだらないことを言っている場合ではない。何故なら謎の影が向かう先は、穂群原学園。遠坂凛の通う高校であったのだから。

7、初日―4

その日、衛宮士郎はかなり遅くまで学校に残っていた。校舎の簡易修繕から備品の修理まで、頼まれたモノを際限なく請け負っている内に気付けばこんな時間である。夕日はとうの昔に沈み込み、星の瞬く静かな夜となっていた。校舎には既に誰もおらず、身内に教師がいる彼だからこそこの時間まで居残ることが可能であった。と言っても、何処か教師と言い様に無い義姉が学校の鍵を預けて行ったと言うのが真相であるのだが。あと少し、もうちょっと、そう思うのは人間の常である、しかしその思考が無償奉仕に近い備品の修理に発揮される人間は希少だろう。その結果がこの有様である。よくよく考えてみれば、抜けてるところが多い割に変な処で鋭い義姉はこの結末を予期していたのかもしれない。そう考えると、気を使われたなと多少申し訳なくなる。詰まるところ衛宮士郎とはそういう少年であった。流石に星が見えるまで居残る事はそう無い、放送室のＡＶ機器のチェックに最近はお馴染みになりつつある陸上部の備品の修理と点検、生徒会の雑務手伝い、これだけの内容を一人で一日で終えるだけでもかなりの重労働である。むしろ一日で終わるだけ御の字だろう。労働を終えた後特有の開放感と気怠さを覚えながら、帰宅するだけの筈であった。ああ、そうだ。

そこにイレギュラーが無ければ。

そして彼は、ただその日に帰宅が遅くなったという理由だけで非現実に巻き込まれることと相成ったのである。

★

「っ……少しは配慮して走り、なさいよっ」

「最初に言っただろうが、知らねえぞってな」

夜の冬木に影二つ、双方黒尽くめで黒い弾丸の如く街を屋根を疾走する。先行する影は追走する影より身軽と見えて、既に追走する側の視界には捉えられなかった。何しろ追走者の肩には人間が担がれている、離されるのも当然であろう。だが追走する側もさるもの、見えぬ相手をほぼ正確に追い掛けていく。担がれた影は担いでいる影に文句を垂れるが、聞き入れられそうにも無い。そも己が急がせている以上はそこまで役体のない事を言える訳でも無かった為、結局口を閉じる事となる。無論言う迄も無く追走者は凛達である。荷物宜しく担いでいるのはガッツ、荷物宜しく担がれているのは凛であった。

「見失うんじゃないわよ」

「問題無え、これだけ痛めばな」

「痛む？」
　せめてもの意趣返しに嫌味でも、と放った言葉に対する返答にリンは首を傾げた。真逆自分が重くて体が痛むとでも言いたいのか、人外の膂力の持ち主の癖に。それ以前に痛みと追跡に対する関連性がよく分からない。揺れる視界でガッツを見れば、我関せずと言ういつもの表情である。取り敢えず取り逃がさないのであれば良いか、と考え直す。痛みを覚えようとなんだろうと戦闘に支障がなければ良い、それに慣れているかのような言動からは焦りは感じられない。ならば、問題は無いのだろう。無論、後で問い質すが。
「建物か、デカイな」
「やっぱり……一体何の用だって言うのかしら――あ、痛っ!?」
　視界に入るのは予想通りの建物、穂群原学園。先程のサーヴァントらしき存在はここに入って行った事は、まず間違いないだろう。追うべきか否か、と言う意を込めてガッツに目をやる。それに対してガッツが鼻を鳴らして行った行動は、まず凛を地面に放り投げると言う人としてあるまじき、ガッツとしては実に自然な行動であった。
「寝転がってる場合じゃねえぞ、どうすんだ此処から」
「人を叩き落としといて言う台詞じゃないわよ。……そうね、一応確認。中にいるの？」
「ああ……いけ好かねぇ気配だ」

ゾッとする殺意を背に、敢えて互いに顔を合わせずに会話を続ける。凛の背後の気配はさながら牙を研いでいる魔獣の様だ、何にせよ心臓を大事にしたかったら見ないに限る。確かに敵とは言え、他のサーヴァントに対して此処まで敵意を滴らせるのは何なのだろうか。思考は脳に氷水を流し込んだが如く明瞭に保つ事を心掛け、凛は校舎敷地内へと踏み込んだ。

「姿が見えないわ、一体何処に――」

（リン！）

「Ｅｉｎｅ（一番），ｚｗｅｉ（二番），ｄｒｅｉ（三番），Ｖｅｒｋｌｅｉｎｅｒｕｎｇ（軽減）Ｔｒｉｐｌｉｃａｔｉｏｎ（三重化）!!」

宵闇の奥に目を凝らした矢先、脳内にパックの声が響き渡る。その危機的な響きに、凛は本能に近い動作で防御魔術を構築した。背後に向けてトパーズを三つ射出、拡散しながら飛んで行ったそれは凛たちを覆う大きさの正三角形を構築し、着弾。瞬間、白い力場の様なものを出現させて対消滅する両者。古来からの矢の天敵は風、その概念を利用した矢除け引いては飛び道具の加護結界であった。トパーズに封じられたのは風、その概念を使用したこの結界は切り札の一つでもあった。

「セイバー！」

「黙って見てろ」

凛が指示を飛ばす瞬間には、もう黒い外套が視界の前に閃いていた。流れる様な動作で義手を振り上げたガッツ、その義手の上には何時の間にか小型の弩弓が据え付けられていた。間髪いれずに連続発射される短矢は、吸い込まれる様に闇へと飛んで行く。それを避けたかの如く、闇が揺らめいた。そこに合わせる様に、火花を散らす小さな物が数個投げ込まれ、爆発。強化した視界でようやく捉えられる攻防の中、闇の中の姿を刹那の間だが明瞭に照らし出した。

門に程近い校庭の端に、何かが立っていた。黒革であろうコートに、目の様な銀刺繍の微章（エンブレム）の縫い込まれた黒い制帽。ブーツも黒い編み上げブーツを履き、全てが闇と暴力の気配を撒き散らしている。右腕にはガッツの義手以上に重厚感のある小手の様なものを装備し、その横にはＳＦに出てくる射撃武器の様な恐らくは武器が固定されている。左腕には印形を耐えず変えながら蠢く小手の様なものを装着していた。そして全体から威圧感を醸し出す体躯は、ガッツに勝るとも劣らぬ大きさであった。

「【止まれ】」

「な……に？」

背の大剣に手を延ばしつつ、追撃に走り出そうとしていたガッツが急停止する。声から漏れ出たのは理解出来ぬと言う驚愕の声、足を止めたのは己の意思ではないと言わんばかりの響きであった。理解出来ぬ事象を古来から人は魔法や魔術と呼称して恐れて

きた。そして、ここにいるのはその恐怖をこそ専門に扱う存在――魔術師である。その中でも優秀と自他共に認める存在である凛は、目の前の黒い男が何をしたのか朧げに理解した。

「一工程（シングルアクション）でサーヴァントにまで効力を発揮する神経支配……何それ、桁が違うじゃない！」

呪式発声（ハードヴォイス）とでも言うべきだろうか。発言そのものに乗せた魔力を対象の耳から脳に侵入させ、緊急停止の擬似パルスを神経に誤認識させると言う絡繰だろう。凛にも似た様なことは出来なくはないだろうが、戦闘中にしかも英霊相手にそれを可能とするほどの緻密な術構成は不可能だ。先ほどの恐らくは凛の使用するガンドをより強力にした魔力弾による攻撃も含め、全く見た目からしても信じられないが。

「キャスター、のサーヴァント……なの？」

全く肉体的に虚弱になど見えないが、本当に予想通りであるならばセイバーのカモとも言える。何しろキャスターを評して曰く、最弱のサーヴァントという異名がある。クラススキルで高い対魔力を持つセイバーには生中な魔術では太刀打ち出来ず、他のクラスに比べて身体能力では格段に劣る為に近付かれることはそのまま敗北を意味する事と同義に近い。だが、そう思えるほど甘い相手ではなさそうに見える。

「ここは公安当局により作戦区域に指定されている、侵入者は速やかに排除する」
無個性な機械が口を開いたかの様な無機質な声と共に、黒いサーヴァントの右腕の物体が微かな唸りと共に動き出した。砲口のように見えた部分から細身の黒い棒の様な物が突き出し、手首に近い辺りから握りが飛び出す。黒い棒（ブラックロッド）をガッツに突き付けながら口にした宣告らしき言葉の内容は、全く意味が分からないが確実に戦闘意思だけはありありと伺える。対するガッツは無言、だが気配だけが膨れ上がって行く様に感じられた。ぎりぎりと、ガッツの内圧が高まって行く。対する黒いサーヴァントからは凪いだ様に何も感じない。まるで死人が動いているかの様だと、凛は感じた。
そんな中。
ぎり、と微かに歯が軋む音が聞こえた。
「排除だ？――やって、みろよ」
瞬間、黒い風を捲いてガッツが掻き消えた。まるで、限界まで引き絞られた弓から放たれた矢の如き速度である。それに対し、黒いサーヴァントもキャスターとは思えぬ身のこなしで跳ねる様に横へ飛ぶ。遅れて重々しい衝撃音と風圧、慌てて目をやるとキャスターの立っていた地面を抉り取り、あの鉄塊剣を振り下ろした状態のガッツを確認した。そのまま驚いたことに、片手で大剣を操りキャスターの移動位置を薙ぎ払う。先程の強化視力でも終えぬ速度とは違い辛うじて追う事の出来る速度だが、何にせよ常軌を

逸する速度である。同時にキャスター程度であれば両断されてもおかしくない。だが、凛のサーヴァントが規格外なのと同じく、相手も規格外だった。

「受け止めた?!本当にキャスターなの、コイツ?!」

思わず凛が叫ぶ。ガッツの横薙ぎは、キャスターの左腕によって受け止められていたのだ。その腕には先程とは違う印形が蠢き光っている。見たのは初めてであるが、何か見覚えがある様な気がする。自分の腕を見て、ふと気づいた。魔術刻印、魔術の系譜たる生きている刻印――それに似ている。恐らくは、用途によってあの刻印を変更して使用するのだろう、差し詰め自在護符とでも言うのだろうか。幾らなんでもパラメータＡ＋のガッツと、キャスターが腕力合戦が出来るとは思えない。であるならば、自ずと其れを為している源は推測出来る――そして弱点も。

「Ｆ・ｎｆ，（五番）Ｓｅｃｈｓ，（六番）Ｇｅｎａｕｅ（精）（密）Ｓｃｈｉｅ・ｅｒｅｉ（射）（撃）!」

呪文と共に、二つの紅玉（ルビー）が螺旋回転をしながら高速射出されて行く。ライフル弾の如く高速で飛翔するルビーは、火を封じてある。貫通性と狙撃精度が高く、着弾した瞬間内部から対象を焼き払うえげつない術式でもある。不意をついた形ではあるが、先程のやり取りを思い出す限りまともな効果を得られるとは期待していない。ここで重要なのは二つの事、それを確認できれば上出来。ガッツへの援護になれば最上である。

「……!」

キャスターが言葉にならぬ声と共に凛の宝石の魔弾に対して行った行動に、凛は己の確証を深めた。キャスターは、凛の魔弾を受ける為にわざわざガッツから距離を取ったのだ――これはつまり。

「キャスター、アンタの弱点は見えたわ。確かに強力だけど、その印形……同時に二つの効果は発動出来ないわね？」

キャスターは凛の攻撃を避ける為に、わざわざ接敵していたガッツから離れた。近接型とわかりやすいガッツの間合いから離れたとも取れる行動だが、凛一人を落ちない様に抱えて尚そこまで離される事のない距離で追いかける事が可能だった事実を鑑みるとそれは下策である。離れた瞬間に距離を詰められて喰いつかれる事は確実であり、無理な逃亡による体勢の崩れは反撃はおろか防御すら危うくなる。障壁の様な防御であるならば問題は無いが、左腕の印形で発動する魔術は発動体である左腕を中心として発動する。それはガッツの大剣を、わざわざ腕で受けた事からも理解できる。

「さあ、観念なさい？そうね……目的と、ついでにマスターの名前でも吐いてもらおうかしらね？」

油断無く新しい宝石を指の間に構えながら、凛はそう宣告した。事実上の勝利宣言でもある。ガッツも大剣を下げているが、恐らくは相手が何かしようと動こうとした瞬間に逆袈裟に斬って捨てるだろう。隻眼に、未だ鬼火が灯っている。このまま事態は沈静

化する、そう思っていた矢先だった。
「あれ、まだ人が……って、遠坂？」
「【呪弾】、圧唱（クライ）」
「セイバー!!」
「……ち、面倒臭えな」
誰何する声、詠唱、叫びと応答は、散る赤、空を切る大剣と言う結果を齎した。誰もいない筈の校舎から出てきたのは赤い髪の少年、彼の誰何の声が事態を動かした――極めて悪い方向に。
「……衛宮、君。アンタ、タイミング悪過ぎるのよ」
ポツリと漏らした凛の視線の先には、胸に紅い華を咲かせた少年が倒れていた。呼吸は浅く、目も濁っている――長くは持たないことは明白であった。少年――衛宮士郎が何故か校舎から現れた瞬間、まずキャスターが動いた。最初に凛達に放ってきた魔力弾らしい呪弾なる魔力射撃を、敵対していた筈の凛相手では無く現れた士郎に対して行使した。為す術無く胸を直撃され、血の華を咲かせて倒れ伏す士郎。ガッツは此方をちらりと見た後、無言でキャスターを追って行った為に今はいない。
分かってはいた、目撃者に対しては何らかの処置はせねばならない。記憶を消すか本人ごと消すかの違いである事は凛としては理解しているが、それでも知り合いの命がこ

う言った形で消えていくのは堪えた。
「リン……助けてやらないの……？」
「この馬鹿が、悪いのよ」
「じゃあ、何でそんな顔してるんだよ」
　パックの顔は泣きそうであった。何故か自分の視界も少し歪んでいる様な気がした。反射的に手を当てようとして、自制する。何故かは分からない、分からないがそうした。自分の中で色々な物が鬩ぎ合っているが、何も表には出さなかった。それが矜持と言うものだろう。
「リンが迷うなら、俺がやる」
　その逡巡は、パックの言葉で断ち切られた。

8、初日―5

「あれ……ここは、家か？」

目が覚めた衛宮士郎が最初に漏らした言葉は、余人が聞けば寝惚け過ぎであると判断するであろう一言だった。少なくとも彼としては、昨夜自宅に帰った記憶が一切無い。それどころか、もっと酷いことがあったような――。

「――あれ、俺確か」

死んだような気がする、発作的にそう口走りかけた言葉は、無意識に口元に当てた手によって形にならずに、口中でのみ不明瞭な音として呟かれた。何を自分は言い出したのだろうか、と彼は自問自答した。死んだ、などという言葉は軽々に口に出して良い言葉ではない、特に衛宮士郎にとっては尚更である。死とは、ただそれだけで彼にとってはある意味で最大の禁忌だった。それ以前に何故自分は死んだ、などと言う荒唐無稽な結末を唐突に抱いたのか、と彼は未だ霞掛かった頭を振りながら記憶を取り戻そうと躍起になった。誰かに極めて細かく破られた紙の様に細分化され、脳内でぐるぐると回る昨夜の記憶はその遠心力によって彼にその全貌を掴ませない。

学校、校庭、黒い人影、紅い心臓、聞き覚えのある声、聞き覚えのない声。

そして、紅い人影。

乱れ飛ぶ記憶の断片を掴んで手繰り寄せる中で、幾つかの確固たる手応えを感じた士郎はその記憶を再生する。一つは穿たれた心臓であったが、確認するまでもなく無事である。そも無事でなくては、今思考している己は存在しないのだから当たり前と言う話でもある。念の為に確かめても、傷跡一つ残っていない。その事実も何かしら違和感を感じる様な気がしなくもないが、些細な引っかかりでありそれ以外の大きな違和感に呑まれて消えてしまった。

もう一つの手応え、それは紅い人影で、小柄で、更には少女だった。そして更にもう一つの断片。はっきりと間近で見た事のない筈の距離で、その少女は彼を覗き込んでいる。

その、顔は。

「……遠坂？」

彼が、真相に至るのはもう少しばかり先の話である。

★

「何故、あんな事をしたのかしら？」

「何故って……そんな問い詰められる様な内容かなあ」

近所からは幽霊屋敷とも噂される、完全洋式の邸宅である遠坂邸では尋問が行われていた。尋問官は凛、被告はパックである。凛としては至極真剣なのだが、居間にはなんとも微妙な空気が漂っていた。それは生来からのお調子者且つ能天気な被告の妖精の醸し出す何かの所為なのかも知れないし、帰ってきて早々に壁に寄りかかって寝始めた黒い巨体の三年寝太郎の所為なのかもしれないし、それらの双方の所為かもしれない。一つ言える事は、尋問を始めた時点で既に尋問の空気ではなかったと言う凡そ認めたくもない事実だけであろう。

「で、答えなさい。何故マスターである私の意向を無視して彼……衛宮君を復活させたのかしら。それとその手段も併せて聞きたいわね？」

「そんな堅っ苦しい顔しなくてもいいじゃんか」

だって、無関係の人が巻き込まれちゃったんなら助けるに決まってるじゃないか――パックの発したその言葉に、凛はほんの微かに目を見開いた。それは確かに正論だった、少なくとも日の当たる場所に於いてはどこに出しても異論の出ない確実な正論で正義で人道の正道であった。それに対して違和感を覚える事以前に、言われて腑に落ちた己の感性に凛は愕然としたのである。魔術師としては特に問題の無い思考で、そして彼女は魔術師である。そうあるべきと定めていた筈だが、何処かで日常との線引きも行っていた。戦争と日常、その線引きで言うならば今はまだ宣戦をされていない日常である

べきである。不本意な事態があったとしてもそれは日の当たる場所での思考に準ずるべきであり、日の当たらぬ魔術師の思考で事に当たるべきではなかった。少なくとも、起こった事後処理に於いては。自分でも思った以上に状況に引き摺られていたのかしら、そう凛は内省した。思考の切り替えが必要な時期に切り替えが出来ない人間が、聖杯戦争と言う秘蹟を執行出来る筈もない。

「そうね、確かにそうだわ」

「そうだよー、もーなんであんなとこで固まっちゃうのさー」

せんじょうではおくしたやつからしぬのだ、しかしわたしくらいのいくさになれたエルフであれば――などと妄言を垂れ流しているパックに密かにだが、感謝しておこうと凛は思った。徹頭徹尾軸がぶれないであろうあの能天気さは、時として素晴らしい精神安定剤になる。結局の所、昨夜は結果だけをみれば上々の出来ではあったのだから。

「パックの妄言は置いておくとして――昨夜の情報を整理しましょう」

闘争の空気に茹だった頭は冴えた、であるならば次は分析の時間だ。遠坂凛は時間を無駄にはしない、未だに虚空に向かってエルフじげんりゅうがどうしたなどと鼻高々に喋っているパックを左手で捕まえて、右人差し指を突き付ける。極めてにこやかにその指に魔力を収縮させ始めると、速攻で左手から逃れたパックは凛の思惑通りにガッツを起こし始める。そこに至るまでの互いの手際はまるで長年の戦友の如き阿吽の呼吸で

あった。当の本人たちにその心算は無い事は確実であるが。
「揃ったわね、ではまず昨日のお浚いからよ。現れた敵は恐らく魔術師（キャスター）と推測出来るわ」
「何故断言出来る」
「簡単よ、他のクラスの英霊ならあの場ではもっと別の手を打つだろうからよ」
　起こされてさも不機嫌そうなガッツの問いに、凛は簡潔に答えた。遭遇時に感じた通り、あそこまで単独で魔術を多様した戦闘を行っておいてキャスターではない筈が無いだろう。例えば槍兵（ランサー）や騎乗兵（ライダー）であるならば双方のクラスの特色でもある速さを活かした戦闘の組み方をするだろう。弓兵（アーチャー）や暗殺者（アサシン）ならば、そもそも姿を表す事が既に下策である。狂戦士（バーサーカー）など論外である、相手は言語を発したのだから。そこまでの論拠を以って尚確証が持てないのは、幾分――いやかなり予想よりも戦闘スタイルがおかしかった事に起因する。
「問題はキャスターであるならば、何故姿を見せたのかって言う事よ。自ら動くなんて、凡そキャスターらしくないわ」
「……そう言うものか？」
「当たり前よ、何の為にキャスターの固有スキルに陣地構成があると思ってるの？」
　一般的な魔術師は、一人前になると己の工房（ファクトリー）を持つ。それは魔術師にとって最も重要な事物である、研究を行う為の拠点である。魔術師（キャスター）の名前が表す通り、このクラスに

値する英霊は十中八九が生前魔術師である。その為、陣地作成――詰まる所工房の作成はキャスターにとっては必須であり、また固有のスキルとして召喚時に付与されることにより、通常は時間をかけて敷く工房を短時間で作成出来る様になっている。間違ってはいけないのは、これは優遇措置と言うよりも救済措置であると言う事実であろう。魔術師とはその生涯が学究の徒である、その彼らが重大且つ崇高なる思索の時間を削ってまで肉体を鍛える筈がない。言ってしまえば英霊としては虚弱なのである。それでも長時間の儀式や実験などで体力が必要なこともあり、一般人に比べればかなり上位の運動能力を持つのが普通ではあるが。

「それが魔術補助があって短時間だったとは言え、セイバーであるガッツと均衡したのよ？こんなキャスターがいてたまるかって言う話よ」

「ふーん、そう言うものなのかあ……オレたちが知ってる魔術師って基本的に突っ込んで行く気がするから、イマイチそういうイメージ湧かないけど」

「どんな脳筋な魔術師なのよ……」

パックの言葉に凛は絶句する他なかった。彼らの世界の魔術師がどんなものかは分からないが、一体何の為の魔術なのか。わざわざ戦場に突っ込んで行くならば、魔術など必要ないのではないのだろうか。考えた所で収拾が付かなくなりそうなので、凛は思考を破棄することにした。

「兎も角、考えたくはないけど直接戦闘で三騎士に匹敵する可能性のあるキャスターである、と言う予測が立てられるのよ」

ガッツ程で無くとも、近接戦闘に適性のあるキャスターなど考えたくはない。それは言葉を変えるならば、キャスターの弱点の悉くを補強したキャスターに似た何かである。どこをどう見ても死角が存在しない。そして、そんな英霊に心当たりなどある筈もない。それ以前に格好が近代以降にしか見えない時点で、事実上キャスターが何の英霊であるのかは濃霧の中である。しかしその情報が有るか無いかではまた雲泥の差である事も確かでは有る為、何の役にも立っていない訳ではない。

「仮定キャスターの戦闘スタイルは、高威力魔術を織り交ぜての中、近接戦闘が今の所確認出来ているわ。左腕の紋様付きの小手が何らかの魔術を発動し、右腕の機械で展開」

「あー、だからか。複数が使えないーとかリンが言ってたのって」

「よく覚えてたわね。随分メカメカしいキャスターだったけど、そこが弱点。発動を左の小手に依存しているの、だから波状攻撃に弱いわ。そこが狙い所ね」

考えれば考える程、複数で事に当たる事を前提にした様な仕様である。もしかしたら、本来は複数でのチーム戦闘を主としている英霊であるのかもしれない。但し、複数前提の癖に単騎であの性能と言うのは流石は英霊と言うべきか。キャスターに付いての情報はこれで大体出揃った事を確認して、凛はもう一つの議題に移る事にした。有る

意味、こちらの方が重大かもしれない。
「では次ね。パック、昨日のあのアンタが出した粉――あれは何？どう見ても致命傷の衛宮君が一瞬で治癒したわよ」
　昨夜の戦闘後、巻き込まれた顔見知りの同級生は確実に致命傷だった。ギリギリ生命反応は有るものの、高密度の魔弾で撃ち抜かれた胸は向こう側が見えていたのだから。己の一点物である高純度ルビー、これを使えば確率は五分だが蘇生の可能性はある。だが、切り札中の切り札であるこの百年物のルビーをここで使ってしまう事は、聖杯戦争に参加している魔術師として断じて容認出来ない事である。救うべきか、救わざるべきか――煩悶する凛を横目に行動を起こしたのはパックだった。
　オレがやる、と一声叫んだパックが姿を現し、彼の上で羽ばたいたのだ。羽ばたく度に傷の上に落ちる、鱗粉は瞬く間に傷を光で覆う。状況が状況でなければ幻想的な光景であろう、少なくとも大の妖精好きで知られる大推理作家として著名な某コナン氏辺りに見せれば、己の探偵小説の版権を売り払ってでも写真を撮りたがるに違いない。暫くして羽ばたきを止めたパックが、これでおっけー、と呟いた時には既に傷は跡形も無くなっていた。その後、ガッツに担がせて彼の家まで運び、記憶を弄った後にそのまま寝かしつけたのである。家を知っていたのは、彼の家がそれなりに有名な武家屋敷であったからである。

「んー、そういえば説明してなかったかも？オレたち妖精の鱗粉は知る人ぞ知る秘薬でさ、すげー効くんだぜー」
「なんで、そういう重大なことをさっさと言わないのかしら。この能天気妖精は」
「あ、ひでー！そういうこと言っちゃう?!」
　正直斥候程度の役にしか立たないかと思っていたが、真逆パックにこんな隠し球があるとは思っていなかった。昨夜から今日にかけて、パックの株が凛の中で急上昇している。あのレベルの傷を癒せるのであれば、支援要員としてはこれ以上を望むべくも無い。キャスターも大概だと思っていたが、どうやら己の方もまた大概であると凛は認識を改める事にした。
「……おい、喜んでる所悪いがな。さっさとその餓鬼の家とやらに戻るぞ」
「何よ急に……何か、あるの？」
「手前にしちゃ鈍いな。目撃者は基本的に消すのが常道なら、生きている目撃者はどうなる」
「消しに戻ってくる……真逆。これ以上危険を冒して、また行動を起こすと言うの？」
「奴はアレだ、騎士の連中の様に命令には黙々と従う口だ。ならそんな事は関係無いだろうよ」
　今のあの餓鬼は生き餌だ。さっさと戻れば、餓鬼の始末に血道を上げるあの野郎を血

祭りにあげられる。そう言って嗤うガッツの顔は、外道も道を譲るであろう凄惨さであった。元からこの腹積もりだったのだ、この男は。それに気付いて凛は怖気が走った。魔術師以上に魔術師らしい思考であり、効率的にも悪くない賭け――喪われるのは何にせよ関係の無い命なのだ。それは同時に戦場の思考である、漸く何故この二人が召喚されたか凛にも理解出来た。凛の持つ二面性、この二人はそれぞれが彼女の二面性に類似点を持っているのだ。

「……一度手間を掛けた相手が死ぬのは労力の無駄よ、迎撃するわ――ガッツ」

「また、荒っぽくなるぜ。お姫様よ」

「無駄口はこの後に及んで必要無いわ」

　その言葉に肩を竦めたガッツは、凛を肩に担ぐと矢の様に駆け出した。向かうは、衛宮宅――

9、初日―最終

「ふん、どうやらもう取り込み中らしいぜ」

古式ゆかしき平屋作りの武家屋敷、衛宮邸の庭塀は見事に破壊されていた。当たり前の如く担いでいた荷物を投げ落としてガッツは首を回した。派手な音は聞こえないが、派手な雰囲気は感じる――矛盾したようだが始めての事では無い。まあ、足元で荷物が何やら文句を垂れている様だが、ガッツとしては最低限の望みは聞いてやった自覚があるが為にそれ以上は知ったことではなかった。敵は荷物の小娘曰く、何でも魔術師などという人種に当たるらしい。ガッツからしてみれば中々に響きからして山師の様な名称だが、そういうものであるならばそういうものとして扱えばいい。今までの人生経験から、未知も既知も不可思議も全ては同じ次元に落とし込める事をガッツは知っていた。敵が何だろうと、何処にいようと、逃がしはしない。断ち切れる物ならば全て叩き斬る。只管に慣れた痛みを刻む首筋に指を当てれば、それは血に濡れていた。そう、彼に痛みを刻むモノ。それ即ち、何を以ってしてでも殺すべき存在なのだ。愉悦と言うには凄惨な、忿怒と言うには異質な表情を浮かべるガッツは今まさに殺意の体現者となっていた。

「――ちょっと、聞いてるの？魔術体系が違い過ぎて何とも言えないけど、遮音の結界だわ。外に音が漏れない分、中にも音は聞こえない……言いたい事は、判るわね？」
「横合いから叩き殺してやるよ」
「精々やり過ぎない様にね」
　全く違和感の一つも抱かぬとばかりに荷物の様に担がれたのはいいが、全く違和感の一つも抱かぬとばかりに放り出されるのも凛としては予想はしていた。しかし、やられてみれば矢張り文句の一つや二つや三つばかりも出てくるものだろう。言い連ねてみようかと思ったが、どうせ聞かないと思い起こして現実に返った。思い起こしたのは数分ばかりガッツに言い散らかしてからであったと言う事実は、蛇足に過ぎよう。しかし、そのお陰で気付いた。目の前には見事に破壊された庭塀に穴の空いた庭、しかし全くの静寂を保っていると言う事実。確かめる為に、一息吸って細く吐き出す。
「Briefmarke（刻印）　Drehung（回転）,　die（起）　beginnt（動）.
Ein（瞳）　Schuler（は）　wird（解）　gelost（き）　und（て、）　wird　es（私）　aufgetr（に）
　魔術刻印の発動は原動機に似ている、魔力と言う不定形のエネルギーにより刻印を廻して起動するのだ。念には念を入れて三工程（トリプルアクション）の解析呪文を構築し、発動させるた結果は思った通りの防音結界。不思議な事は人払いの結界が張られていないのはどう言うわけだろうか。普通は双方共に仕掛けるものだが……矢張りどこか普通の魔術師とは

違う。少なくとも、結界の起動点や構築を見る限り先程逃亡したサーヴァントである事は間違いないだろう。それ位あのサーヴァントの魔術構成は特異だ。それをガッツに示唆した意味は一つ、派手に演っても問題はないと言う意思表示であった。それでも釘を刺したのは、家主である同学年の少年に対する凛のせめてもの情けである。何せ凛には弁償する気などさらさら無い、気持ちだけでもと言う奴だ――おまけに気持ちには金がかからない。彼女の使う魔術は兎角金を食う為、自然に身についた経済観念だった。解き放たれるのを待つ野獣に似た空気を発するガッツにちらりと横目を向け。

「セイバー、断ち切って来て」

その声で、人型の殺意は戦場へ放たれた。

★

「な、なんなんだ、こいつ……！」

「公安当局より目撃者及び当事者の消毒を最優先事項に設定されている」

「くっ……！」

ポスターを丸めただけの武器とも言えない長物が、一瞬だけ正面の黒いコートの男が振るう黒い杖（ブラックロッド）と拮抗し、斬り落とされる。片やただの厚紙、片や刃の付いている様には見えない棒の、打ち合いには見えないこの事象が起きているのは両者ともに魔術を使っている事に尽きる。衛宮士郎が正体不明の敵としか言いようの無い男に襲われたのは、

軒先であった。以前の屋敷主である彼の義父が仕掛けた侵入者用の魔術警報が鳴らなければ、恐らく既に彼の命はなかったであろう。彼を救ったのは義父からの遺産であり、それに彼は感謝すると同時に歯噛みした。そんな士郎の内心なぞお構いなく、黒い制帽に目の微章を付けた表情がまるで動かない死人が迫る。その姿は士郎の脳裏に焼き付いていた断片の記憶の一つだった。身近にあったポスターに魔力を通す事によって強化し、何とか迎撃したものの半ばから斬り落とされたポスターの残骸を投げ付けて脇をすり抜ける様に駆け出す。危なげなくそれをロッドで叩き落とした死人は急ぐ事なく士郎を追う、死人は決して焦らない。

「同調（トレース）、開始（オン）！」

庭の隅の土蔵に駆け込み、扉を閉めて、閂をかける。ここまでを一動作でやってのけ、そのまま閂に強化の魔術をかける。これで少しは持つだろう、と士郎はほんの少しだけ緊張を緩めた。その間にも武器になりそうな物を物色する手は止めなかった、土蔵の中は彼の修行の場であり息抜きの場でもある。この空間だけは士郎を裏切らない、そんな気すらしてくる。

「こんな物しかないか……」

何故か昔から衛宮士郎と言う少年は武具に惹かれた、中でも長剣や短剣と言った刀剣に。今彼の手の中にあるその物体もまた一つの刃物であり、武器であった。腕に装着し

て使う仕込み短剣、彼が魔術訓練の息抜きに作成した、数多転がる魔力で投影したガラクタの一つである。何かの雑誌で見た特殊なこの武器を何の気なしに投影したはいいが、刃こそある物の外見だけの言わばロマン武器である。何しろ投影して分かった事だが、この刃を使うには構造上指を斬り落とさないと使えないのだ。未だ嘗て武器など投影したことはなかった為の失敗だったのかもしれない――そう考えて放置していた物であった。

「でもこんなのじゃどうしようにも……痛っ」

武器の風上にぎりぎりで引っかかるかもしれない程度の武器だが、無いとあるとでは現状では精神的な面でかなり違う。しかし、そもそもが装備出来ないとなると結局のところ意味がないのである。そう考えて手放そうとした士郎だったが刃で指を軽く切ってしまった。じわり、と滴り落ちて床に吸い込まれて行く血は何とか今も彼が生きている事を証明している様にも思えた。

「っ、おもい、だした……！」

そして、その鮮烈な紅を見た時に、士郎の記憶は唐突に噛み合ったのだ。夜の校庭で自分が殺された事、手すら触れずに恐らくは魔術で自分を殺した相手の事、それと斬り合う黒い剣士。そして、赤い少女。網膜に焼き付けたその顔は、三つ。人とは思えぬ凶相の男と、己を殺す死人の顔、最後には見知った美麗な少女。

「【呪刃】、発唱（コール）」

抑揚のない声が、高速で記憶を巻き戻し再生していた士郎の意識を現実へと醒ます。ぱきり、と言うあっさりした破砕音で強化した門が破壊された事を悟る。元から大した時間稼ぎにならない事は分かっていた、先程の攻防とも言えぬ一幕だけで彼我の魔術の質の差ははっきりと分かる程に士郎は劣っている。それでも尚立ち向かうのは何故か、ゆっくりと床板を踏みしめながら土蔵へと侵入してくる死人と相対しながらその答えを士郎は痛いほどに理解していた。仲間もいず、対するは己の命を取りに来た死人。まるでゲームだ、と苦笑するほどの余裕すらある。視界にはもう相手しか見えない、死を前にした驚異的な集中力が他に振り向ける注意力と言うリソースを全て眼前の敵に注ぎ込んでいたのだ。両手に持つ仕込み短刀を構える彼の顔には諦めだけは存在し得無い、何しろ生を諦めるなどと言う傲慢はこの身に赦されてなどいないのだ。

ぽたり、と一雫の血液が短刀から垂れる。それが暗黙の合図だった。

「公務を執行する」

「……死んで、たまるか！」

振り下ろされた黒杖と宣告を裂帛の気合の声が受ける。刃筋の立て方が上手かったのか、ぎゃり、と音を立てて偶然にも黒杖は受け流される。そして、その偶然の対価として士郎の手は己の持つ短刀の刃で切り裂かれていた。更に滴る血液が床を濡らす。

それを他人事の様に捉えながら、士郎はまだ短刀を離さない。血液が滴り落ちた足元から、濃密な魔力が漂う事にも気付かずに死人の眼を睨む。

「お前、何だかわからないけど！ここでなんとかしないと俺の時みたいに人を殺すんだろ？――なら、止めないと！」

その確固たる意思は叫びとなり、放たれる。己の命すら惜しむ事は無い、その意思を言葉に出した瞬間――彼の足元から光が瞬いた。

「想定外事項発生、対処する」

「あ、あ、あ、あ、あ……！」

黒い死人が左掌に埋め込まれた印形を変化させ、その光に対する何らかの対応を取ろうとしたその瞬間を士郎は見逃さなかった。火事場の馬鹿力で床を踏み抜く勢いそのままに突撃しようと雄叫びを上げる、が流石に素人の動きを見逃す程馬鹿ではなかった。飛び掛かり、中空にある身体を裏拳で殴打、もんどり打って吹き飛ぶ士郎の目の前には黒杖の先端、無常の声が引導を渡そうと紡がれる。

「【呪弾】、圧しょ……」

「さて、喉が潰れてもその文言を唱えられるか試してみるか？」

静やかな声が、黒い死人の呪言を途絶えさせた。まるで意識の合間を縫ったかのように、忽然と出現した白い人影。そして、黒い死人の喉元からは先程まで士郎が持ってい

た筈の短刀が、背後から生えていた。
「ふむ、簡単には死なないか。どうにも厄介な物だ。初めまして、君が私のマスターとやらかな？――む？」
「敵性存在を確認、排除する――【呪弾】、圧唱（クライ）」
　音もなく腕元にするりと短刀を滑り込ませながら、瞬時の内に士郎の前に現れる。細やかな装飾をされた白いフードの下に、頑丈さが見て取れる防具を着込んだ男だった。隠れて目元が見えないが、士郎にかける声は真摯なものである。だが、士郎の言葉を聞く事なく、男は唐突に訝しげに入口に視線を向けて唸った。それに答えたのは黒い死人、左掌の印形が激しく光り輝く度に損傷が修復される。瞬く間に喉の傷を塞いだ死人は、戦闘続行を発言し――同じく白い人影の視線の先に魔術を発動する。
　衝撃音。
　重さと勢いで半分程閉じていた外開きの土蔵の扉。それが外に向かって放たれた魔力弾の衝撃で勢いよく開け放たれたと同時に、どう言う方法かそれを打ち返された衝撃を受けて、半壊した音である。
「知らねえ内に、一人増えて随分と楽しそうじゃねえか。何で増えてるんだか知らねえが――さっさと、死ね」
　扉の向こうから現れたのは黒い男だった、長大に過ぎる大剣を振り抜いた体勢から

炯々と激情の色を湛えたその眼は、何よりも殺意の権化である。黒い剣士ガッツ、堂々の参上であった。

最初に動いたのは死人だった。ガッツの獲物であれば狭い室内の方が一見有利であると見える。だが、一度相対してガッツの膂力を知っていた死人――キャスターは逆に室内は危険と判断、印形を瞬時に変更し何らかの魔術を起動、凄まじいまでの瞬発力で外へと逃げ出した。対して己の脇をすり抜けて逃亡しようとする黒いキャスターを確認したガッツは、背後に飛びながらもその勢いを利用して回転するかの様な横薙ぎを放つ。死人は超人的な瞬発力で既に間合いの外であり、大剣を振り切った隙を見逃さずに間合い外からの攻撃を選択する。

「【致死】、圧唱（クライ）」

「ハ――遅えよ」

キャスターが発した致死の呪文は、ガッツの身体を隠す様に構えられた鉄塊により霧散させられる。未だ塀を超えたばかりだった凛は、遠目からそれを目撃して息を飲んでいた。ガッツが飛び込んだ直後の土蔵から放たれた蒼い光と魔力の渦は確実に召喚が為された結果である。彼女の脳裏にある召喚者候補は一人の少女、この家に良く訪れていると聞く彼女の半身とも言える少女だ。真逆、それを行ったのが思考の慮外にいる当事者の少年だとは流石の彼女も現状想像してはいない。

桜が、いるのかしら。そうであるならば今度こそ彼女は、敵として相対せねばならない。その想像をチラリと脳内に展開し、振り払う。邪念は、目の前の結果すら逃すと分かっているからであった。

しかし、と凛は思考を続ける。ガッツはセイバーの割りに対魔力の低さがネックだと思っていたが、あの大剣にそんな使い方があったとは、と舌を巻く。恐らくは大剣に宿る持ち主にも牙を向きそうな程に攻撃的な神気が、剣腹に当たった致死の呪文を分解してしまったのだろう。相も変わらずデタラメな男である、と半分呆れてもいた。呪文を圧唱した直後の隙をガッツも見逃さない。瞬時に間合いを詰め、烈風すら巻き起こす神速の袈裟懸け。それに何とか対応したキャスターをこそ賞賛すべきであろうか。ギリギリで身体を横に飛び退く様に移動させる。地面を掘り返し土砂を巻き上げながらの逆袈裟気味の斜め薙ぎは、キャスターの額を掠った程度で躱される。土蔵からそれら人外の攻防を目撃した士郎は息を飲む。黒い剣士の剣捌きに黒い死人のトリッキーな動き、それらは一つ一つが極致に身を置く者の業であった。

「さて、あの二人が熱心にやりあっている内に自己紹介でも済まそうか。マスター?」

「マスターって……誰が?」

「君のことさ、ラインが繋がっているのは分かるだろう?――兎も角、君は私のマスターだ……この殺し合いのね。さあ、私と言う手駒で君はあの二人をどうする?」

淡々と白い男は士郎に、あの二人への背後からの強襲を匂わせる――今ならば隙を突けると。それに士郎は素直に頷きを返せなかった。己の記憶が正しければ、あの黒い剣士は己を救ってくれたのかもしれない恩人である。自分を襲ってきたもう一方の相手にしても、それを殺すか、と聞かれるとどうしても忌避感が否めない。

「では、このまま見ているのも一興か。恐らくそう時間はかからないで終わるだろう」

士郎の心中を読み取ったかの様に頷いた彼は、士郎を土蔵の外へと連れだした。彼の言う通り、数合の打ち合いの後、魔人同士の争いは終局を迎えていた。

「グ、ググ……!」

「どうした、そんなもんだったか?」

掠った額を押さえながら呻くキャスターに不信を憶えたガッツは、挑発で様子を見る事にした。大した傷では無い、手応えすら無かった程度だ。薄皮を切り裂いた程度、とガッツ自身は判断していた。しかし、それだけの手傷で唐突に壊れた人形のように動きを止めるキャスターの様子は不気味であった。今の今まで死人だった顔に微かに表情が伺える様にすら見えるのはまるで、死人から人に戻ろうとしているかの様にも見えた。刹那の思考により、ガッツは状況を押し切る事に決める。

「じゃあな、死人」

『見つけた見つけた、みぃつけた!やっと出てこれた!』

ガッツは振りかぶった剣を止めた、声の主はどこにもいない。されど存在だけは感じる。なんだ、これは――ここまで明瞭に声が聞こえるにも関わらず、気配を感じる事のできない相手をガッツは知らない。それ以前に、首が痛まない事が不可解さを増している。声の位置を探すのは手間ではなかった、それはなんと庭塀の欠片だったのである。

『探しても無駄無駄ムゥーダッ!あたしは言霊、彼の中に残った残りカス!』と、無数の欠片が一斉に口を聞いた。

なんだ、こいつは――その呟きと共に庭塀の破片は大剣によって粉々に砕かれる。だが、お喋りは止まらない。

『初めまして、さよなら!私はヴァージニア・サーティーン。私は捨て駒、私は用済み、私はただのゴミ!そして目覚まし時計!よーくお聴き、よくお聴き!』と、庭の木が口を開いた。

「……言霊だけの存在?魔力を消費したら消えてしまうだけの木霊で何を?」と、凛が眉を顰めて呟いた。この出来事自体が全く意味を掴めない。

『汝魔術士、七重に名を秘めし者!されど今、我は汝が名を七たび呼ばん!!』

言霊は只管に調子外れな少女の声で一方的に続ける。ガッツは害はないと判断し臨戦体制で構えるだけである。どの道、物理的な攻撃は何の意味も為さない。

『スレイマン!【嗤う悪霊】!』

『スレイマン！【スペルジャグラー】！』
『スレイマン！【踊る死人占い師】！』
『スレイマン！【馳せる疫病】！』
『スレイマン！【怒れるジョーカー】！』
『スレイマン！【悪意のアヴァタール】！』

庭木が、土蔵の扉が、障子が、大黒柱が、瓦が、塀のひび割れが、投影の失敗作であるスピーカーが、それぞれ声を出し、静かになる。

「解呪にしては、おかしな手順ね……？」

「クハ」

凛の呟きは、キャスターから漏れた呼気の漏れた様な嗤い声で以て返された。全員の視線がキャスターへと集まる。当のキャスターは今までの無表情が嘘の様に肩を震わせて噛み殺した様な嗤い声をあげる。

「ハ、ハ、ハ！」

呵々大笑、そんな言葉が浮かぶ程の嗤い声。そこに含まれた感情は嘲笑、表情もまさに人間的な物が浮かんでいる。それ即ち——悪意と傲慢。

「クハ、馬鹿が馬鹿どもが！寄ってたかって群れて来やがる。素晴らしい眺めだ、素晴らしすぎて漏らしちまう！」

いつの間にか、キャスターの左眼が蒼い虹彩を持っている事に皆が気付いていたが誰もそれに違和感を持たなかった。そも同一人物なのか疑わしいと言う認識で統一されている以上、些細な事であったのかもしれない。それ位、唐突な変貌だった。

「初めましてとご挨拶申し上げたい処だが、親愛なるクソ忌々しいクソマスター殿が帰って来いと煩い。残念だがここまでだ、嗚呼全く残念だ！」

お礼に全員腐れた死体に御招待したいところだったんだが、と愉快に話すその眼は正気で、狂気だった。息をする様に狂っている。と凛は怖気を走らせた。

「じゃあな雑魚共、今度はパパがゆっくり寝かしつけてやるからなあ？」

全員を、その中でも主に凛を舐め回す様に視姦して、背を向ける。己が上位者であると全く疑わない、傲慢さが満ち満ちている。

「そう言うな、ここで死んでけ」

ガシャリ、と重々しい音が鳴った。ガッツが義手を支えるように構えている。何をする、と凛が問いかける間もなくいつの間にか咥えられていた紐を躊躇なく引き絞る。

爆音。

「アンタ、何してんのよ……！」

「た、大砲?!」

轟音と共に義手の手首が折れ、火炎が飛び出した。向かう先は元キャスターだった何

か、だがそれに向かって印形の掌を伸ばした元キャスターに、あっさりと受け止められていた。
「死ねだって？【煩え、馬鹿手前が死ね】！」
「チ……！」
　返す刀で発生されたのは只の声、だが込められた魔力の桁がおかしい所為でそのまま致死の呪いと化してガッツに襲いかかる。それを剣腹で再び受け流して、気付いてみれば敵は消え去っていた。
「逃げられた、わね」
「……ああ」
　凛の言葉に、ガッツが憮然とした表情で頷いた。一先ずの戦闘の終結を見たところで、もう一つの問題を片付けようと凛は振り返った。
「遠坂……だよな？」
「私以外に誰に見えるのかしら、衛宮君？――処でそこのサーヴァントは、未だ戦闘の意思はあるのかしら。そこまで殺気をぶつけられると、私としても彼を抑えられる自信は無いわ」
「……いや、今は敵対しないさ。なあ、マスター」
「敵対……って、なんで俺と遠坂が？」

そう言う士郎の顔は全く状況を理解していない様に見えて、凛は溜息を吐いた。戦闘は終わったが、自分の苦労はここからの様だ、と。

10、初日→二日目――幕間

「聖杯？戦争？英雄を召喚しての殺し合い？何を言ってるんだ遠坂？」
「……私としては、貴方が魔術師だってことの方が信じられないわよ」
朝、目が覚めた衛宮士郎が見たのは、自宅の土が掘り起こされたり、縁側が半壊していたりと色々と普通では無い状況だった。そして一夜を過ごした穂群原学園のヒロインとも称される同級生の少女の顔でもあった。更にその少女から色々と普通では無い事を言われた衛宮士郎の脳内は、寝起きという事を差し引いて控えめに言っても混乱の極みにあった。己の所業である強化魔術の時点でかなり一般的な常識では普通じゃ無いのではないか、と言う話なのだが、如何せん今の士郎に其処まで役体もない事を己に突っ込むと言う技術を求めるのは酷な事だろう。現在彼としては、凛に修復の手伝い位やれ、と言われた黒い巨漢がめんどくせえと一言でそれを切り捨てて背後の居間で柱に凭れかかって寝ていると言う現実、彼の認識能力は必死にそれを否定する事に全精力を傾けていた。同時に、どこから資材を持ってきたのかてきぱきと修繕を進める、白いフードの男の事も同時並行で認識対象外に追いやろうとしている。他人が彼の思考を覗いたならばこういうだろう――なんだ、現実逃避か、と。

凛も凛で一夜明けた今もまだ色々と混乱していたが、聞きたい事を大まかに一言で表現出来る程度にはまだ冷静だった。聞きたい事とは何か、詰まる所要は冒頭の会話の通りだった。今此処に至るまでに誤算は幾つもあった。例えば、予想していた召喚者が物理的な距離としては近く、心の距離としては遥か遠い場所にいる実の妹では無かった事。例えば、どんな方法を取ってでも参加者を特定する事がある意味肝である聖杯戦争において、己の目の前で誰も把握していないマスター候補がマスターになると言う状況。例えば、それ以前に何度も言うが、まず大体にして衛宮士郎が魔術師であったこと――全てが予想の範疇外であった。

「そりゃあ、こんな話誰にも言えるわけないんだから遠坂が知っているわけないだろう？」

「根本的な理解の時点で会話に擦れが生じてるのは、よく分かったわ」

互いの認識レベルに於いて言えば、当たり前と言えば当たり前である説明する必要もない認識、それが既に互いに隔たりを感じる程擦れている事に凛は溜息を隠せなかった。確かに一般的な人間に対しての考え方であれば士郎の言い様は正しい、魔術師とは存在すら秘匿せざるを得ないマイノリティーの極みである。まともに受け取って貰える訳はない、黄色い救急車などと言うものは都市伝説であり実在しないが、その救急車の搬送先と言われている所謂精神病院と言うものはこの世界に歴として存在している

のだ。

「でもね、同根の士に対してその認識は間違っていることくらい分かっているわよね？

――隠していた割に、己が魔術師だと潔く認めたのは感心するけど、今まで私に挨拶も無しとは貴方の師父はどう言うつもりだったのかしら」

「挨拶って……たまにすれ違う時に位はしてるぞ、俺だって。其処まで礼儀無しな人間じゃない」

「たまにすれ違う時位には……？いや、ちょっと待って」

凛は何かを言い募ろうとした士郎を制止した。今この男はなんと言ったのか、と凛は言葉を脳内で反芻させた。

――たまにすれ違う時に位は挨拶をしている。

確かにたまにすれ違う時に会釈程度交わしたことはあった様な気がする。だがそれは唯の挨拶であって、彼女が示唆した挨拶ではない。凛が言いたい事はけじめとしての挨拶である、何故それが伝わらないのか。魔術師としては常識中の常識であろう、寧ろどの様な形であれ一度形成されたどんな社会に於いても必須な常識である筈である。面通し、と言い換えてもいい。

遠坂とは、歴史こそ其処までは無いものの名門である。それは一門の始祖が大師父と呼ばれる魔導の伝説的人物である事にも由来するのだが、少なくともその辺りにいる

血筋だけの有象無象よりは余程高位に立っているであろう一門である。そしてその功績をこそ認められ、遠坂一門は――引いては遠坂凛はこの冬木と言う地に根を張る事を許され、魔導に於いては日本有数の重要地であるこの場所の魔術的管理者（セカンドオーナー）として認定されているのだった。魔術協会から大幅な自由度を許され霊地の管理を委託されている。それは即ち、魔術師としてこの地に足を踏み入れる存在は遠坂に対して一言義理を果たさなければならない。それを果たさぬと言うのであれば、それが協会の所属員であってもある程度の懲罰を科す事すら可能である。それが所属員ですらない在野の魔術師であれば、極端な話殺されても文句は言えない――管理地におけるセカンドオーナーとは、そう言った権力の持ち主なのである。

「この際衛宮君が協会の所属なのか在野の魔術師かは置いておくわ。……この地が遠坂の管理にあるのは知ってる？」

「教会って……俺は敢えて言うなら仏教徒だぞ。管理って、遠坂の家って政治家かなんかだったか？」

　この答えで凛は全てを察した、そしてこの上なく疲労を感じずにはいられなかった。この男は、未だ以て信じられないが、セカンドオーナーの事を何一つ知らずに生きている。それどころか魔術を志しながら、協会すら知らないのだ。こんな魔術師がいてたまるか、凛は内心で呻いた。魔術師として基本以前の知識を何故知らないのか、と。兎に

角、こんな有様なのだから話も通じる訳が無い。
「……良い、衛宮君？貴方と私は同根の――詰まり闇に紛れ、世界に存在する凡ゆる学問を凌駕する最古の学問を学ぶ学徒、魔術師よ」
「そんな、大げさな……」
「誇張でも何でもない只の事実よ、何も知らない様だもの――」
――死する寸前までが学びの半ばである魔術師として、死ぬにしても何も知らないで死ぬのは嫌でしょう？
冷静に顔色も表情も変えず、極当たり前の事を口に出した様な素振りの凛の言葉に、士郎は思わず絶句した。その眼の光はあくまで硬質、その眼差しは無機物に向ける眼差しであった。学校で見ていた凛とした近寄り難い、言うなれば高貴な雰囲気とはまた違う――静かな威圧感が隅々まで張り詰めたその様子に、士郎が思った事は『住む次元が違う』と言う表現の難しい感想だった。目の前にいる筈なのに同じ立ち位置にいるとは思えない、それ程に士郎が知る遠坂凛とは別物の風格であった。
「貴方が参加したのは、魔術師同士骨肉相食む無情の戦争。生き残るには、己の駒を最大限に生かして他の全てを喰らうしかないわ」
「……本気で、言ってるのか？」
「この後に及んで言葉遊びをするつもりはないわ。それとも私達が冗談で殺し合ってい

るとでも?」
「済まない、言い過ぎた」
　それこそこの後に及んで信じない、などと士郎には言えるはずもなかった。話だけを聞けば荒唐無稽にしか思えぬ内容だが、それを違和感無しに納得できるだけの体験を既にしている、それも二度も。そこまで考えて、いつの間にか封印されていた夜の学校での記憶が蘇っている事を士郎は思い出した。心臓を確実に打ち貫かれた事も、救われた事も。救い主が目の前の少女であろうという推測をも。そこまで辿り着いた瞬間、士郎は慌てて頭を下げた。
「そうだ、遠坂……俺、御礼を言わなきゃならないな。どうやったか知らないけど、校庭で助けてくれたのは遠坂だろ?」
　本当にありがとう、そう言って頭を下げた士郎に今度は凛が慌てる事になった。この空気で、実は渋ってる内に空気を読め過ぎて一周回って読めてない某愉快型妖精が、こっちの苦悩もなんのその勝手に治した、となど言える筈も無い。何しろあの時点で衛宮士郎は彼女にとって一般人であり、セカンドオーナーとしては魔術儀式の結果から保護すべき庇護民であった。それは実際は彼女に無届であった在野の魔術師であった為、結果的に庇護責任の発生する様な問題ではなかった、などと言う結果論で解決する問題では無い。ひとえに己の純粋な力量不足で無関係であった同級生を巻き添えにして殺

した、と言う事実だけが厳然と彼女の目の前にある。遠坂凛は他人にも厳しいが、それ以上に己にも厳しい。凛が衛宮士郎に対して行った行為は、あるべき己の姿に照らし合わせて確実に恥ずべき行為だった。それ以前に、決まり悪い事この上無い。互いにとって微妙に思惑のズレた不可思議な沈黙が漂う中、口火を切ったのは、切ってしまったのは矢張り妖精だっだ。

「あ、それ治したのオレだぜー」

「えっ?」

「あっ」

軽々とは口を開けぬこの沈黙、それをいともあっさりと破砕したパックを凛はガント銃殺刑に処す事を0．5秒で決断した。話がまともに通じ、聞くところによる妖精種よりどころか戦闘以外ではガッツよりも余程役に立つせいか忘れていたが、パックとて立派な妖精であり、絶妙なタイミングでその真骨頂を体現したのである――本人にその自覚は無いのであろうが。凛としては、父の妖精に対する警告がパックにも適応される事が頭の中から抜けていた為に、ダメージも大きい。パックとしては己の処刑執行書にでかでかとサインをした挙句に、それを飾り文字にまで仕上げた状況であったのだが、どう見てもそれを全く理解していない様である。

「えっと、君が俺を?」

「そうだぜ！あ、オレパックって言うんだ、よろしくなー」

そんな凛の心中など知らぬと、当の二人は勝手に親交を深め合っていた。パックに至っては己の名前まで明かしている始末である。凛には既にそれを止める気力は無かったが、パックの命がまた風前の灯へと一歩近づいたのは確かであろう。それは兎も角としても、凛としては実質直接的な戦力ではないパックの名前が割れた所でさしたる問題でもないと言うのが本当のところであった。知られない事に越した事はないだろうが、ガッツの情報が漏れるよりは事の軽重としては圧倒的に軽いし、異世界の来訪者の名が知られた所でそこから対策を立てる事はほぼ不可能に近い。

聖杯戦争においてサーヴァントの真名を知られる事を恐れるのは、其処からその英霊に対して何らかの対策を立てられてしまう事である。英霊は強力極まりない存在だが、抽象的な存在でもある。彼等は一度現れれば現世に凄まじい影響を与えるが、彼等自身もまた風評により時に看過し得ぬ程の影響を受ける。生前に死した原因とされる物が伝承者の中で真実として根付けば、それは真実と取って代わられてしまう程に。毒を塗った短剣で刺された事により死んだ英霊がいたとしよう。その死因が毒ではなく短剣での失血死であったとしても、伝承により短剣の毒で死したと語り継がれて浸透してしまえば、その英霊を縛る死の因果は短剣ではなく毒となる。召喚された英霊は己の死した原因――詰まり因果に弱くなるが、この場合本来の因果である短剣には因果が絡ま

ず、毒に因果が絡むのだ。そして召喚された英霊は、毒全般に対しての耐性が低くなるなどの不具合を顕在化させる事で伝承と現実の辻褄を聖杯は、ひいては世界は合わせるのである。そう言う意味では、彼等にまだ死の因果がない事は凛に取って大きなアドバンテージでもあるのだ。

「パック、その辺で止めておかないと後で話し合いをする事になるわよ?――彼を見れば話が早いわね、あれがサーヴァントよ。聖杯戦争の為の参加証であり、私たち参加者の刃でもあるわ。そしてその手の甲の痣こそ、聖痕。令呪と呼ばれる、強大なサーヴァントの手綱を取る為の切札よ」

その言葉にガタガタ震えるパックを無視した凛の視線の先には、未だに柱に寄り掛かり蹲ったままのガッツの姿。それを確認した士郎の表情が、微かに引き攣ったように見えた。自分が一度死に掛けた原因も、生き返らせてくれた恩人も、等しく殺し合いの為の暴力装置であると聞けば、幾ら温厚な人間であっても平静ではいられないだろう。少しの間をおいて士郎が呟いた。

「……夢で終わらせたい様な内容だ」

「終わらせられるわよ。それを望むなら、ね」

「だが、我がマスターはそれを望まないだろうな」

横合いから入った男の声に、凛は舌打ちを噛み潰した。士郎の自失の呟きに、凛はそ

れに寄り添うことで敵を一人穏便な方法で潰そうとしたのだが、それを阻まれたが故の舌打ちだった。初歩的な誘惑（テンプテーション）の魔術でしの思考を誘導する事で、穏便な方法でリタイヤを促そうとしたのだ。それは凛にとっては最大限の優しさでもあった。幾ら目の前の同級生が魔術の闇に身を置いているからとて何も知らぬ眼も開かぬ赤子の様な無知な顔見知りと殺し合いをしたい程、凛の魔導の闇は深くはない。それが魔術師として正しいかどうかはこの際犬に食わせる、合理的な思考としても互いに損失無く得を得るこの方法は称賛されて然るべきである。それに横槍を入れたのが、いつの間にか士郎の背後にいた白い男だったのだ。

「勝手にマスターを思考誘導させるのは止めてもらおうか……個人的な意見だが、そう言う手合いには反吐が出る」

「あら、反吐が出ようと私は構わないわよ。どうぞ、存分に出して下さいな?」

「実に寛大な申し出だね、ならば此方も、君が唐突に血反吐を吐いてしまっても失礼を見過ごそうじゃないか。ああ、ローブに血がついても私は気にしないから」

「あら、宣戦布告?」

「真逆、レディ。只の挨拶だよ」

白い男と赤い少女は、言葉遊びの応酬で互いに微笑み合う。

それは肉食獣同士の牙の剥き合いにも見えた。

11、二日目――1

「私がその気になった瞬間に、君の首は胴体と永遠の別れを告げなくてはならないのは分かっているかな、レディ？」

「随分と陳腐な脅迫ですわね、ミスター？お里が知れてしまいますわよ？」

居間にて両者一歩も譲らずに舌戦で火花を散らし合う様は、これも一つの戦争であると言わんばかりの覇気に満ちていた。満ちてはいたが、互いに血の気が多すぎる――士郎は思わず呆れてしまった。

遠坂凛と言う少女について、彼女を知る余人に聞けばこう返って来るだろう。曰く、『高嶺の花』『容姿端麗』『文武両道』――簡潔に言えば、非の打ち所の無い絵に描いた様な完璧な優等生であると言う評価である。そして友人である生徒会長とは違い、彼女との接点がそう無かった士郎自身も大体はそのような印象を持っていたものだった。

これが士郎と何故か懇意にしている弓道部の女部長や、陸上部の自称黒豹なる愉快を通り越して稀に不愉快極まりなくなる女ランナー辺りからになると別の感想が伺えるが、それはまた少数の意見であった。多数の人間にとって不都合な真相は、いつの世も大多数の願望と言う名の意思に封殺されるものであり、当たり前の如く士郎がそれを知

る由もない。よって、彼の知る遠坂凛とは一体何だったのか、と士郎が目の前の惨状をどこか遠い眼で眺めていたのも栓無き事であろう。
「えーと、二人とも……ちょっと落ち着かない――」
「衛宮君、少し待ってなさい。彼とはここで少し話し合う必要があるわ」
「マスター、少し待っていてくれ。この淑女に慎ましやかという言葉を教えておかないとね」
「……ええと、ごめんなさい？」
　割って入ったは良いが、事態の収拾を付けるどころか何故か謝る羽目になる士郎である。物怖じしない――と士郎には見えたパックなる妖精は何があったかがたぶると震えたままで、最後の事態を収束させられそうな希望は我関せずと黒い塊と化して寝たままである。既に匙を投げかけている士郎である。
「冗談は兎も角、初めまして――暗殺者（アサシン）のサーヴァント」
「そうだな、マスターが怯えている。初めまして――あの巨剣からして……差し詰めセイバーのマスター、かな？」
「想像は自由よ、お互いにね」
「全くだ」
　気付けば互いの間のやり取りは表面上平静に戻っている事に、遅ればせながら士郎は

気付いた。平静と言うにはまた違う――表情こそ動いているが互いの間には感情の動きが何も無い。この状態を平静とは言い難いだろう。

「さて、社交辞令で時間を無駄にする事も無いわ。単刀直入に行きましょう――衛宮君」

「な、なんだ？」

「貴方が一度限りなく死に近づいたのは事実、その一因が私達である事もまた、事実」

詰まり貴方に対して私は借りがある、凛は敢えて士郎にそう告げた。士郎の命を助けた事は大きな貸しではある、しかしそれも士郎が巻き込まれた結果である。逆にこれは巻き込まれた方の自己責任を問う事で分けに持ち込む事も十分可能であった。

少なくとも彼女の知る衛宮士郎と言う少年は、彼女が何も言わなければそれで分けにする処か恩にすら来てくれるであろう。だからこそ、この方便は敢えて使わなかった。彼女の自尊心が使わせなかったのである。それに何をどう言おうと、これら全ては今から本題に入る為の手妻の一つであるのだ。

「そんな事は無いだろ、遠坂がいてもいなくても俺はきっと巻き込まれてた」

「向こうがそう思うならそれでいいじゃないか、マスター？まあ、彼女の話を聞いて見ようじゃないか」

士郎を柔らかく制しながら、白いサーヴァントは凛にそれとなく目線を向けた。続きを促しているのだろう。随分とやりやすくお膳立てしてくれるわね、と凛は感じた。つ

いでに言えば少々露骨でもある――士郎は気付いてはいない様子だが。
「衛宮君、貴方は思惑はどうあれサーヴァント召喚を行い成功してしまった。剰え、既に敵性サーヴァントとの戦闘も行い、撃退している。である以上は、望む望まずに関わらず巻き込まれる事は確定事項よ」
「あれは正当防衛だろ!?」
「それが通じる相手であるならば、端から貴方は襲われていないと思うけど?」
凛の言葉に顔を顰めながらも、士郎はその言葉に渋々納得した。話し合いをしようにも、少なくともあの寡黙な黒いサーヴァントに対してその手の会話が通用するとは思えないし、実際通用しなかった。最後に唐突に人格が変わったかのように多弁に豹変したが、士郎の結論は変わらない。寧ろ、意思疎通の点では、此方の方がより困難なようにも思える――まるで狂人の様な男であった。
「それとも、サーヴァントを放棄して聖杯戦争を降りると言うのであればまた話は変わるけれど?」
「出来る……のか?」
「ええ、やり方自体は簡単よ。此処で貴方が降りても、恐らくは参加者の誰からも文句は言わないでしょうしね。私だって出来る事なら知り合いの死体は見たくないわ」
そう提案した凛ではあるが、士郎がその方法を了承するとは到底思っていなかった。

だからこそ、後腐れ無く済む様に誘導暗示をかけようとしたのだが、敢え無く失敗してしまった。であるならば、衛宮士郎がこの戦争を無事にやり過ごす為には、彼が戦争に参加し、尚且つ敵を打倒する他は無い。回避など存在しない――それは厳然たる現実であった。だからこそ、凛は士郎にその方法を提示する。

「貴方の手にある刻印――令呪を使って、そのサーヴァントを自害させなさい。そしてそのまま教会に駆け込めば、綺礼は――監督役は戦争の敗者として彼に持ちうる権限を最大限に使用して貴方を保護するわ」

「ちょ……っと、待て。真逆それが方法だっていうのか?!」

「ええ、貴方が戦いを回避出来る唯一の方法よ。令呪とサーヴァントこそが聖杯戦争の参加権、裏を返せばそれを喪わない限りは敗者と認められはしないわ」

「……」

「直ぐには決められない事位は分かっているわ、でも選択の時間はそうは無い――少し、貴方のサーヴァントと話し合って見ることね」

そう言って凛は席を立った。それを感じたかガッツが薄らと目を開き、また閉じ直した。特に気にする事も無く襖を開き、閉じた。賽は投げた、投げられたと表現するのが本来の諺であろうが受け身の表現で使用するのは何と無く違う気がしたのだ。飽くまで賽を振ったのは彼女、その賽を彼女に投げられたのは衛宮士郎である。振られた目が

どうなるのかは、彼女にもまだ分からない。当て所無く廊下を歩む足取りは乱れる事は無い、士郎がどちらを選ぶにしろ彼女の行動には変わりは無いのだから。
「アイツ、どうするんだろうね」
「さあ、ね。結局は彼が決める事よ」
　二階の和室に腰を落ち着ける事にした凛の肩に座るパックがふと呟いた言葉に、凛は冷徹に返答をした。実質そうとしか言い様が無いのだが、パックには不評だったらしい。顔を見ずとも、頬を膨らませている様子が手に取るように判る。
「文字通り命を懸ける事が最低限の心構えの戦いに、他人がその行動を決める事は出来ないわよ」
「シロウを最初っから不戦敗させようとしたのにそんな事言うのか、リンは？」
「戦うか戦わざるか――衛宮君からしてみれば理不尽な選択肢を突き付ける前に、知らなくとも生きていける事を知る前に終わらせてあげようって思ったのよ。まあ、邪魔されたけど」
　そして、彼が死ねば悲しむ存在がいる。脳裏を過ぎるのは暗い色の長い髪をした少女。思えば凛の記憶では暗い顔をしている印象が多かったその少女は、あの少年の側にいる間だけは様子が違ったように思う。あの娘がどんな表情を見せているのかは知らないが、それを壊すのは偲びない――それもまた偽らざる遠坂凛の本音だった。

「ふーん……それだけ？何にしても、リンは変なとこで優しいんだよな」
「な、何よ突然？」
「べっつにー？」
「……仲が良い様で、何よりだ」
　ニヤニヤし出したパック握り潰さんとばかりに拳に力を込めた辺りで、呼びに来た白いサーヴァントに曰く何とも言い難い顔をされ、凛が羞恥で赤くなる顔を全精神力で抑え付けるのに苦労したのはまた別の話である。
「こちらの腹は、決まった」
　居間に移動して開口一番に白いサーヴァントはそう言い放って、口を閉じた。その後を次ぐ様に士郎が静かに口を開いた。
「俺が参加してもしなくても、この戦いは進むんだろ？」
「――ええ、そうよ」
「無関係の人も、死ぬかもしれないんだよな」
「それは分からないわ。でも、無いとは言い切れない」
「なら、俺は――」
　――この戦いに参加して、お前達を止める。
　衛宮士郎は、そう言い切った。

「聖杯なんてモノがあるから、そんな事をする。なら、無くなればいい。俺がそいつを壊してやる」
「……本気で、言っているのかしら？」
「ああ、本気だ」
　迷いの無い真っ直ぐ過ぎる視線に圧力染みた物を感じて、思わず凛は視線を逸らしたくなった。彼女は衛宮士郎を、凡人だと思っていた。だが、この視線を受けてその印象に若干の変更を入れざるを得ない、そう感じた。こうまでも透徹な視線を受けた記憶はそうそう無かった様に思う。そして皆無、と言えない己に多少の疑問を感じた――私は一体何処でそんな経験をしたのだろうか？
「さて、此方の回答は決まったが……それを踏まえた上で、そちらは我々の貸しに対して何を以て返してくれると？」
「――衛宮君の聖杯戦争の参加手続きを、責任を持って代行させていただくわ。」
　再び士郎に代わり交渉を始めたサーヴァントを、凛は覚めた眼で眺めた。これから先の話はただの出来レースである、衛宮士郎から参加の意思を受けた以上、この場は彼以外の全てが望むレールに乗せる為の只の詐術。実に魔術師らしいやり口じゃ無いか、凛の内心の思考は微かな口元の緩みに表された――それは、実に冷たい微笑だった。この展開は白いサーヴァントにしても渡りに船であった筈だ。何を望んで召喚に応えたの

か、それを知るのは当人以外には無い。しかし、応えた以上は目的が有る。士郎が参加前から聖杯戦争を降りるとなれば、白のサーヴァントは何をも成せぬまま再び英霊の座に戻るだけ。向こうとしても本意であろう筈がない。だから、凛の話に乗ってきたのだ。サーヴァントのクラスとしてはほぼ暗殺者（アサシン）で確定だろう。そして頭も切れるとなればクラスの特徴である神出鬼没な動きを活用した搦手を取ってくる事は間違いが無い。凛としては聖杯そのものには大した興味が無い以上、戦争の勝者となるならば破壊しようとも構わないとも内心考えてはいる。だが、聖杯と言う強大な魔術器がこの地に存在するからこその己の他に対する重要性も、また理解している。魔術師となろうと派閥や政治から逃れられないのは、最早人間の性であるかもしれない。

「では、ここは素直に言葉に甘えても良いかと思うが……どうかなマスター？」

「そう、だな。遠坂には迷惑を掛けるけど……」

「なあに、向こうが持っている借りを返してもらうだけさ。そう下手に出る事も無いだろう」

「引っかかる言い方だけど、まあ間違ってはいないわ。取り敢えず、彼のクラスはアサシンなのよね？」

「隠すほどでもない、その通り私は暗殺者。闇夜に紛れて命を狩る存在だよ」

当の本人から答えが出た事に少し凛は鼻白んだ。アサシン程、有る意味正体を隠した

いサーヴァントもいないと思うのだが。何しろアサシンのサーヴァントは歴代全てが――。

「――ハサン・ザッバーハ、真名まで簡単に知られて良いのかしら？私には得しか無いけれど」

「さあて、世話になる手土産とでも思って欲しい物だね」

互いに瞬間、目を細めたのを互いに見逃す事は無かった。それは両者ともに、互いの胸中を探り合う視線であった。視線の交差は一瞬、胸中を読み取れぬと言う事だけを読み取れた凛は、アサシンと言うクラスに付いて詳細を脳内に呼び出していた。

アサシンと言うクラスは色々と特殊なクラスで有る。クラスを知られる事は、それがそのまま真名を知られる事に繋がると言う稀有なクラスである。歴代のアサシンのサーヴァントは全て同じ名前を持つ存在で構成されていた。それは暗殺者を体現する名であり、一つの名を共有する匿名の複数の暗殺者の真名である。アサシンとは元々集団の名前であった、と古来の文献にはある。子供を攫い、快楽と薬物で調教し、精強無比の顔の無い暗殺者を生み出して行く。多くが名を持たぬその中でも、最強とされる存在にだけ与えられる名がある。

その名を、ハサン・ザッバーハ。

死の運び手と言う意を持つ、最強とされる暗殺者の総称であった。